

【論文3】

釈尊の出家・成道・入滅年齢と
誕生・出家・成道・入滅の月・日

森 章司

- 【1】はじめに
- 【2】釈尊の出家年齢に関する資料
- 【3】釈尊の成道年齢に関する資料
- 【4】釈尊の入滅年齢に関する資料
- 【5】出家・成道・入滅年齢に関する伝承系統
- 【6】満年齢か数え年齢か
- 【7】原始聖典による誕生・出家・成道・入滅の月日
- 【8】入胎の月・日
- 【9】出胎の月・日
- 【10】出家の月・日
- 【11】成道の月・日
- 【12】入滅の月・日
- 【13】その他の文献が伝える誕生・出家・成道・入滅年齢とその月・日
- 【14】入胎・出胎・出家・成道・入滅の月・日に関する伝承系統
- 【15】結 語

【1】はじめに

[1] 正確な釈尊の伝記を再構築し、細かな「釈尊年表」を作成するためには、その大枠ともいべき釈尊の出家・成道・入滅年齢や、それが「満年齢」か「数え年齢」かということ、そしてその月・日について、たとい作業仮説であろうとも確定しておく必要がある。

そこで以下に出家・成道・入滅年齢とその月・日、あるいは入胎・出胎の月・日について、まず基本的資料となる原始仏教聖典に記されたこれらに関する記事を調査し、しかる後に「仏伝経典」とその他のインド撰述や中国撰述の文献がこれらをどのように伝承したかを紹介して、最後にこれらを吟味したうえで、本研究の取るべき結論を導き出したい。

【2】釈尊の出家年齢に関する資料

[1] 釈尊の出家年齢に言及する原始仏教聖典史料の伝承には次のようなものがある。まず年齢を明示する資料を掲げる。

[1-1] 「29歳」とするものが多い。

①DN. 16 Mahāparinibbāna-s. ; 私は29歳で善を求めて出家した。スバツダよ、私は出家してから50余年、正理正法の地を遊行した (ekūnatimso vayasā Subhadda , yaṃ pabbajim kiṃ-kusalānesī . vassāni paññāsa-samādhikāni , yato ahaṃ pabba-

jito Subhadda , nāyassa dhammassa padesa-vattī) 。 vol. II p.151

- ②長阿含 2 遊行經；我年二十九 出家求善道 須跋我成仏 今已五十年 戒定智慧行 獨處而思惟 今說法之要 此外無沙門。大正01 p.025中
- ③法顯訳 大般涅槃經；我在王宮未出家時、一切世間皆為六師之所迷醉、初未見有沙門 矣。……我年二十有九出家學道、三十有六於菩提樹下、思八聖道究竟源底、成阿耨多 羅三藐三菩提、得一切種智。大正01 p.198下
- ④Mahāparinirvāṇasūtra；私は29歳で善を求めて出家した。出家してから50年余と なった (ekonatiṃso)vayasā Śubhadra yat prāvrajaṃ kiṃ kuśalaṃ gavesī , pra- cāśad varṣāṇi samādhikāni yataś cāhaṃ pravrajitaḥ Subhadra) 。 Waldschmidt本 p.376
- ⑤中阿含 204 羅摩經；我時年少童子清淨青髮、盛年年二十九。爾時極多樂戲莊飾遊 行。我於爾時父母啼、哭諸親不樂。我剃除鬚髮著袈裟衣、至信捨家無家學道。大正01 p.776中
- ⑥雜阿含 979；始年二十九 出家修善道 至道至於今 經五十余年 三昧明行具 常 修於淨戒 離斯少道分 此外無沙門。大正02 p.254中
- ⑦增一阿含 42-3；我初學道時年二十九。欲度人民故三十五年在外道中學……。大正 02 p.752中
- ⑧Apadāna 55-543 迦留陀夷；(釈尊が)29歳で出家し6年後に仏、化導者と なる (ekūnatiṃso vayasā , nikkhamitvā agārato , chabbassa vītināmetvā=異本で はchavassāni vināmetvā とする= , āsi buddho vināyako) (20偈) NDPS vol. II p.152
- ⑨根本有部律・出家事；爾時菩薩年二十九、欲在王宮、受五欲樂、既見生老病死、心生 厭離、中夜踰城、往詣林藪、六年苦行……。大正23 p.1026下
- ⑩根本有部律・雜事；(阿私多仙人)遂見二十九年捨王城去、六年苦行当成正覺。大正 24 p.299上
- ⑪根本有部律・雜事；我年二十九 出家求善法 又五十余年 專行戒定慧 一心無散乱 唯求於正理 除斯真法外 無別有沙門。大正24 p.396下

その他これは過去仏の灯光仏であるが、

- ⑫增一阿含 23-1；時王太子年二十九、以信堅固出家學道、即日出家即夜成仏。大正 02 p.609下

とされている。過去仏や未來仏は現在仏としての釈迦牟尼仏のイメージが投影されるのが常 であるから、これも一つの資料としてあげることができるであろう。

[1-2] また「19歳」とするものがある。

- ①根本有部律・破僧事；(阿私陀仙人の予言として)即觀菩薩十九出家、六年苦行獲甘 露果。大正24 p.109下

19歳出家、6年苦行では成道は25歳となる。しかし【3】で紹介するように原始聖典 資料には25歳成道説は見いだされない。ただ中国撰述の『仏祖統紀』に見られるのみであ る。

[1-3] 「31歳」とするものがある。

- ①別訳雑阿含 1 1 0 ; 三十一出家 爾來過五十 推求諸善法 戒定行明達 一切諸世間 不知実方所 況知実法者 若修八正道 能獲於初果 乃至第四果 若不修八正 初果不可知 況復第四果 我於大衆中 説法師子吼 如此正法外 亦無有沙門 及与婆羅門。大正02 p.413下

[2] 直接に出家年齢には言及しないが、間接的に示す場合もあると考えられる。成道年齢を明示して、出家してからそれまでの年数（苦行年数）を掲げる場合や、入滅年齢を明示して、出家してから入滅までの年数を記す場合である。すなわち成道年齢から苦行年数を除し、入滅年齢から出家してからの年数を除せば、出家年齢が求められることになるわけであるが、後に紹介するように原始聖典の成道年齢や入滅年齢を記す資料の中に、上記のような条件を満足させるものはない。

[3] 釈尊の出家年齢に関する資料を紹介した。これには「29歳」を初めとして「19歳」「31歳」などの諸説があることが分かるが、これら年齢がどのように受け取られていたかということを知ることも無意味ではあるまい。

[3-1] 以下にこれを紹介する。

- ①DN.4 Soṇadaṇḍa-s. ; 尊者ソーナダダは古い、年取り、高齢で、晩年に達しているが、沙門ゴータマは年若い青年出家者にすぎない (bhavaṃ hi Soṇadaṇḍo jiṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto , samaṇo Gotamo taruṇo c'eva taruṇaparibbājako ca) 。

沙門ゴータマは年若く、漆黒の髪をもち、美しさ若さを有し、第1期にあるにかかわらず、家を捨てて非家に出家した (samaṇo khalu bho gotamo daharo va samāno susukāḷakeso bhadrena yobbanena samannāgato paṭhamena vayasā agārasmā anagāriyaṃ pabbajito) 。 vol. I p.111

- ②長阿含 2 2 種徳経 ; 沙門瞿曇少壯出家、捨諸飾好象馬宝車五欲瓔珞、成就此法。大正01 p.095中

- ③DN.5 Kūṭadanta-s. ; クータダダは古い、年取り、高齢で、晩年に達しているが、沙門ゴータマは年若い青年出家者にすぎない (bhavaṃ hi Kūṭadanto jiṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto , samaṇo Gotamo taruṇo c'eva taruṇaparibbājako ca) 。

沙門ゴータマは年若く、漆黒の髪をもち、美しさ若さを有し、第1期にあるにかかわらず、家を捨てて非家に出家した (samaṇo khalu bho Gotamo daharo va samāno susukāḷa-keso bhadrena yobbanena samannāgato paṭhamena vayasā agārasmā anagāriyaṃ pabbajito) 。 vol. I p.127

- ④長阿含 2 3 究羅檀頭経 ; 沙門瞿曇少壯出家、捨諸飾好象馬宝車五欲瓔珞、成此法者。大正01 p.098上

- ⑤SN.3-1 ; 世尊は年若く、出家して新しい (bhavaṃ Gotamo daharo ceva jātiyā navo ca pabbajāya) 。 vol. I p.068

- ⑥雑阿含 1 2 2 6 ; 世尊幼年年少出家未久、而便自証得阿耨多羅三藐三菩提。大正02

p.335上

- ⑦別訳雑阿含 5 3 ; 彼諸宿旧、尚自不信得阿耨多羅三藐三菩提。況汝年少而出家未久、而当得乎。大正02 p.391下
- ⑧別訳雑阿含 2 1 2 ; 沙門瞿曇年少出家、而富蘭那六師之徒、悉是耆旧宿德之人、尚不能知、況彼沙門瞿曇、既是年少、出家未久、学日又浅、而当能解如斯之義……年雖幼稚、不応輕蔑。大正02 p.452下
- ⑨増一阿含 3 3 - 2 ; 此沙門瞿曇、年少学道未久豈能知此事乎。大正02 p.683中
- ⑩Suttanipāta V.420 ; あなたはまだ若く、年少であって、第一期に達せる青年にすぎない (yuvā ca daharo cāsi paṭhamuppattiko susu vaṇṇārohena sampanno jātimā viya khattiyo) 。 p.073
- ⑪Suttanipāta 3 - 6 (散文部分) ; 沙門ゴータマは生年も若く、出家も新しい (samaṇo hi Gotamo daharo c'va jātiyā navo ca pabbajjāya) 。 p.093
- ⑫四分律・受戒毘度 ; 余有沙門婆羅門耆年出家学久、猶尚不能解此偈義、況此沙門瞿曇、年尚幼稚出家日浅、豈能解耶。復作是念、年雖幼稚、亦不可輕、亦有年少出家学道得阿羅漢、神足自由者……。大正22 p.791中
- ⑬五分律・受戒法 ; 此六師等年耆博見、尚不能解、況沙門瞿曇既自年少、出家始爾而能解乎。復念……瞿曇雖少不可輕也。大正22 p.106上

[3-2] ここでは釈尊はまだ若く、経験も乏しい宗教家として見られていたことが分かる。おそらくこれは釈尊が悟りを得てから間もなくのことをイメージしているのであろう。それは①②③④⑨⑪などが釈尊の評判が聞こえ始めたので訪れたというシチュエーションとも合致する。まだ釈尊教団が十分に根を下ろしていないことを髣髴とさせるからである。

もし釈尊が「29歳」になってから出家して、その後次項で述べるように「満6年」の苦行を経てからのことにしては、漢訳資料における「年少」とか「年尚幼稚」という表現はいささか気にかからないでもない。しかしこれは①②がソーナダダ、③④がクータダダというすでに老境にあった尊敬を受けているバラモン、⑧が120歳になる老バラモン、あるいは⑤⑥⑦⑧⑨⑫⑬は、これらの資料では釈尊よりかなり先輩とされているプーラナカッサバなどの六師外道などに対比して述べられたものであり、比較対照させるための表現がなされたものであろう。

また次号のモノグラフにおいて出家制度の形成過程について論じる予定であるが、後の釈尊教団においては、7歳などという文字通り「幼児期」にある童子も出家させるようになった。しかし釈尊が出家し、布教を始められた当初においてはそれは異例のことに属し、おそらく結婚し、子供を作って、この子が成長して家業を継いでから出家するという、いわゆる四住期のようなものが成立しかけていて、それを前提に考えられていたであろう。釈尊もラーフラができてから出家したが、生まれたばかりのことで、その分一般よりは早かったのかもしれない。

[4] 念のために後世の仏伝經典の伝承を見ておこう。

[4-1] 次のものは「29歳」とする。

- ①Mahāvastu āvalokita-sūtra ; 菩薩は29歳で出家した (ekūnatrimśo vayasānuprāpto

paripācayitvā jagadbodhisatvo)。Snart 本 vol. II p.299

②十二遊経；仏以二十九出家。大正04 p.146下

③衆許摩訶帝経 卷3；（阿私陀仙）如是觀已得見太子、出彼王城入於山野、年二十九、於其山中六年苦行、証甘露滅成無上道。大正03 p.941上

[4-2] 次のものは「19歳」とする。

①太子瑞応本起経 卷上；至年十九、四月八日夜、……踰出宮城。大正03 p.475中

②修行本起経 卷下；至年十九、四月七日、誓欲出家、至夜半後、明星出時……、於是城門自然便開、出門飛去。大正03 p.467下

③過去現在因果経 卷2；爾時太子心自念言、我年已至一十有九、今是二月、復是七日、宜応方便思求出家。大正03 p.632中

④過去現在因果経 卷2；阿私陀仙、昔相太子、年至十九、出家學道。大正03 p.636上

[4-3] 出家年齢には言及しないが、パーリの“Nidānakathā”は【3】の[5-1]で紹介するように成道年齢を35歳とし、[5-3]で紹介するように苦行年数を満6年とするから、計算上は「29歳」出家説に基づいていたことがわかる。

[5] 次にインド撰述とされる文献で釈尊の出家年齢に言及するものを掲げておく。以下の各節、各項で紹介するインド撰述・中国撰述文献記事については、馬田行啓の「仏伝年次考」（『仏教史学』第3編第2号～第9号 大正2年5月～12月 仏教史学会）に負うところが大きい。

[5-1] 「29歳」とするものには以下がある。

①出曜経 卷13；汝今学以来日浅、二十九出家、自云六年苦行、云何能成等正觉乎。……年二十九出家求道、誇世自称成無上道耶。仏告王曰……。大正04 p.680中

②轉婆沙論 卷14；從兜術天終降生母胎、十月已滿住林毘園生、即行七步、二龍浴身二十九出家、三十五得道、六年苦行已。大正28 p.523上

③尊婆須蜜菩薩所集論 卷10；（広説如雜阿含）二十九修跋陀人、我出家行学道、我已知五十歳。於中學修跋陀。大正28 p.803下

④八大靈塔名号経；二十九載処王宮。大正32 p.773中

[5-2] 「19歳」とするものに以下がある。

①摩訶摩耶経 卷下；已長大至年十九、便於中夜踰城而出。大正12 p.1012中

②大智度論 卷3；我年一十九 出家学仏道 我出家已来 已過五十歳 淨戒禪智慧 外道無一分 少分尚無有 何況一切智。大正25 p.080下 （宮内庁版では二十九とする。このほうが正しいと思われる。）

[5-3] 「7歳」とするものもある。

①梵網経 卷10；七歳出家、三十成道、号吾為釈迦牟尼仏。大正24 p.1003下

ただしこれは中国撰述と考えられるもので、それほど信賴するに足らない。仏典においては沙弥として出家する年齢が7歳である場合が多いので、おそらくこれに影響されたものであろう。

[6] 次には中国撰述の文献で出家年齢に言及するものを掲げる。これには経の引用をするものも含めた（以下同じ）。中国撰述文献の記述はいずれにしても、多くはインド撰述の文献に依ったものであって（中には推論で述べるものもあるが）、中国伝承がどのような文献の系統を引くものであるかを知るためにも役に立つであろうからである。

[6-1] 「29歳」とするものはなく、「19歳」あるいは「29歳」とするものに含まれるのみである。

①大唐西域記 卷6；踰城出家時亦不定、或云菩薩年十九、或曰二十九。以吠舍佉月後半八日踰城出家。当此三月八日。或云以吠舍佉月後半十五日、当此三月十五日。大正51 p.903上

②釈迦方志 卷上；其側塔者剃髮処、年自不定或云十九、二十九者。大正51 p.959下

[6-2] 「19歳」とするものが多い。

①釈迦譜 卷1；爾時太子心自念言、我年已至十九、今又是二月復是七日、宜応方便思求出家。大正50 p.024上

②歴代三宝紀 卷1；（僖王）八年壬子年十九四月八日夜半踰城出家十二遊経云、仏二十出家。増一阿含経第二十四卷云、我年二十九出家欲度人故。又云。年二十在外道中学。長阿含亦云、年二十九出家。推其大例如来在世七十九年、若二十九出家三十五成道、所可化物唯応四十五年。而禅要経云、釈迦一身教化衆生四十九年。諸経多云、十九出家。今以此為正。若以二十九出家三十五成道、経中蓋少。且云、二十年在外道中学。便是五十年方成道。是知為謬也。大正49 p.023中

③唐護法沙門法琳別伝 卷中；昭王四十二年壬申之歳四月八日夜半踰城出家、故瑞応経云、太子十九四月八日夜半…。大正50 p.207中

④釈迦氏譜；（経云）至年十九、思出家時將已至矣。大正50 p.090下

⑤釈迦氏譜；（『因果』云）我年十九、今二月七日出家時至。大正50 p.091上

[6-3] 「25歳」とするものもある。

①仏祖統紀 卷2；当以二十五為出家之年審矣。大正49 p.145上

注に次のように言う。『瑞応』『因果』『中本起』『大論』は「19歳出家」という。『十二遊』『増一阿含』『中阿含』『雑阿含』『長阿含』は「29歳出家」という。どの説に従うべきかといえ、如来の寿命は80歳で、「50説法」を除すと、『梵網』『無相三昧』『宝蔵経』等がいう「30成道」となる。もし「30成道」であるとすれば、「6年苦行」を除すと荆溪がいうように「25出家」となる。上の「宝蔵の説」と合する。また出家の後6年苦行と、妃が6年後に子を生んでそれが成道の年であることは『賢愚経』がいうところであり、『普曜経』の「勤苦6年」の後6年して、12年目に故郷に帰るという記述と合致する。だから「25歳出家」が正しい、と。したがってこれは論理的に導かれた説ということになる。

[7] 以上、釈尊の出家年齢記事について紹介した。原始聖典ではパ・漢資料ともに「29歳」とするものが多く、「19歳」とするものは例外で、しかもこれでは苦行を6年とすると一後述するようにこれ以外の伝承はない—成道が25歳となって不合理であるが、それが仏伝経典やインド撰述文献では「19歳」説が増加して、「29歳」説に並ぶくらいの用例となり、中国撰述文献に至るとほとんど「19歳」説一色になるという不思議な現象が生

じていることがわかる。

【3】 釈尊の成道年齢に関する資料

[1] まず釈尊の成道年齢に関する原始仏教聖典資料を紹介する。

[1-1] その中で具体的に成道年齢を示す資料には次のようなものがある。「36歳」とする。

①法顯訳 大般涅槃經；我在王宮未出家時、一切世間皆為六師之所迷醉、初未見有沙門
実。……我年二十有九、出家学道、三十有六於菩提樹下、思八聖道究竟源底、成阿耨
多羅三藐三菩提、得一切種智。大正01 p.204上

[1-2] 次の文中の「欲度人民故、三十五年、在外道中学」は、後に続く文章からも成道
までの年数を示すものであろうから、これは「35歳」成道説としてよいであろう。

①増一阿含 42-3；我初学道時年二十九。欲度人民故、三十五年在外国中学……。大正
02 p.752中

[2] 釈尊は出家後何年間かの修行（苦行）の後に成道されたのであるから、出家年齢と
修行年数を加算すれば、成道年齢が知られることになる。もっとも出家年齢に異説があつて、
これが異なれば計算の結果もおおのずから異なってくるわけであるが、とりあえずはこれを無
視して資料のみを掲げる。（なおここには他項において紹介した資料も含まれている。以下
同じ。）

[2-1] 以下はその年数を「6年」とする。

①増一阿含 16-8；無此二力（忍力思惟力）者、終不於優留毘處六年苦行。亦復不能
降伏魔怨、成無上正真之道坐於道場。大正02 p.580中

②増一阿含 31-8；含我六年之中勤苦求道而不剋獲、或臥荆棘之上、……吾昔苦行乃
至於斯、然不獲四法之根本（賢聖の戒律、智慧、解脱、三昧）。大正02 p.671中

③増一阿含 41-1；当知、我昔日未成仏道、在優留毘、六年勤苦不食美味身体羸瘦如
似百年之人……。大正02 p.744上

④Apadāna 39-387；その業の熟するままに、私は数多くの苦痛を舐めて、ウルヴェー
ラーで六年を過ごし、その後に私は悟りに達した（tena kammavipākena , acarim
dukkaram bahuṃ , chabbassānuruveḷāyaṃ , tato bodhimapāpuṇim）NDPS vol.
I p.299

⑤Apadāna 55-543；（釈尊が）29才で出家し六年後仏、化導者となる（ekūna-
tiṃso vayasā , nikkhamitvā agārato , chabbassa vitināmetvā = 異本では chavassāni
vināmetvā とする = , āsi buddho vināyako）。（20偈）NDPS vol. II p.152

⑥根本有部律・捨墮 4；爾時菩薩於六年中一無所有、修苦行已後便随意欲受上妙飲食…
…、是時菩薩未解跏趺衆惑皆尽。大正23 p.717上

⑦僧祇律・单提 42；諸比丘白仏言、世尊、何故乃六年苦行如是。仏言、非但今日、如
鳥本生經中広説。大正22 p.365中

- ⑧根本有部律・波逸底迦 5 8 ; 降神母腹及誕生時、漸至童年出門遊觀、見老病死等、遂適林中苦行六年、將為無益道成正覺普濟群迷。大正23 p.844上
- ⑨根本有部律・出家事 ; 爾時菩薩年二十九、欲在王宮受五欲樂、既見生老病死、心生厭離、中夜踰城、往詣林藪、六年苦行、都無所獲隨意喘息、便飡美味乳酪等食……、降伏魔已、便証無上正等菩提。大正23 p.1026下
- ⑩四分律・受戒捷度 ; 時菩薩即於彼處 (鬱毘羅大將村) 六年苦行、雖爾猶不証增上聖智勝法……。爾時世尊、於彼處 (菩提樹下) 尽一切漏、除一切結使。大正22 p.781上~下
- ⑪根本有部律・雜事 ; (阿私多仙人) 遂見二十九年捨王城去、六年苦行当成正覺。大正24 p.299上
; 於六年專修苦行。大正24 p.299下
- ⑫根本有部律・破僧事 ; (阿私陀仙人の予言として) 即觀菩薩十九出家、六年苦行獲甘露果。大正24 p.109下
- ⑬根本有部律・破僧事 ; 六年苦行。大正24 p.158下 (このときラーフラ生まれる)
- ⑭根本有部律・苾芻尼毘奈耶 卷1 ; 於六年中修苦行已。大正23 p.911上
- ⑮根本有部律・苾芻尼毘奈耶 卷8 ; 於六年中……修苦行。大正23 p.948中

[2-2] 苦行の年数を「7年」とする資料もある。

- ①SN. 4-24 ; そのとき波旬は7年世尊に付きまわり、隙を求めて隙を得なかった (tena kho pana samayena māro Pāpimā sattavassāni bhagavantam anubaddho hoti otārāpekkho otāram alabhamāno) 。 vol. I p.122
- ②Suttanipāta V.446 ; (尼連禪河にて) 7年間我 (悪魔ナムチNamuci) は世尊に付き纏わり従った。〔しかし〕念ある正覚者に〔乗すべき〕機会を得なかった (satta vassāni bhagavantam anubandhiṃ padā padam , otāram nādhigacissam sambudhassa satimato) 。 p.077
- ③Apadāna 1-7 ; (ゴータマという姓の世尊は) 家を捨てて出家して六年をすごし (12偈)、7年目に世尊は真理を説くであろう (13偈) (agārā pabbajitvāna , chabbassāni vasissati , tato sattamake vasse , buddho saccam kathessati) NDPS vol. I p.048

これらはすべてパーリ資料であり、①②のいう「7年間」の原語は 'sattavassāni' である。しかし③はより具体的に「6年間を過ごし、第7年目に (chabbassāni vasissati , tato sattamake vasse)」とするから、①②の「7年間」は「足掛け7年」であって、「満」で数えれば「6年」ということになる。したがってこれらも「6年」説にのっとっていることになる⁽¹⁾。

また次のような資料もある。これも「7年」とするが、これは釈尊の父浄飯王の言葉であり、苦行の年数を述べたものではないかもしれない。またこれが苦行の年数で、悟りを得て安堵したという意味にとっても、これは「足掛け」の年数であると解釈すれば、上記と矛盾するものではない。

- ④僧祇律 雜誦跋渠法 ; 世尊出家七年之中坐起食飲無日不啼、惟願世尊、制諸比丘、父母不聽勿令出家。大正22 p.421中

(1) 中村元『ゴータマ・ブッダ I』(中村元選集・決定版 第11巻) p.329では、「満」と「数え」による数え方の相違であることを示唆しておられる。またAN.7-58 (vol.IV p.088)の「7年間慈心を修した」という文章も苦行の年数を表すと考えておられる。これには他に“*Itivuttaka*” 1-3 (‘*satta vassāni metta-cittaṃ bhavetvā*’ p.015)、「増一阿含」10-7 (大正02 p.565中)があるが、ここでは苦行の年数を示すものとは考えなかった。

[2-3] さらに出家後の年数を「12年」とするものもある。

①失訳 般泥洹經；昔我出家、十有二年、道成得仏、開説経法、但五十載。大正01 p.187中

[2-4] 以上のように原始聖典は苦行を「満6年」とするものが絶対多数である。【2】で紹介したように、原始聖典では出家を29歳とするものが絶対多数なのであるから、計算上では成道は35歳となるはずである。

[3] また成道以来何年間教化活動をされたという資料があり、これは入滅年齢から教化活動年数を減じれば成道年齢が得られることになる。これについては【4】の【6】で紹介するが、漢訳の『涅槃經』は49年あるいは50年とする。入滅年齢を80歳であるとすると、これらは30歳成道をイメージしていたことになる。

[4] 具体的な年数は示さないが、おおよその年数を想像させるものもある。これらは修行期間の6年が、当時の宗教家の常識に対して極めて「短い」という評価を表している。

①別訳雜阿含53；彼諸宿旧、尚自不信得阿耨多羅三藐三菩提。況汝年少而出家未久、而当得乎。大正02 p.391下

②別訳雜阿含212；沙門瞿曇年少出家、而富蘭那六師之徒悉是耆旧宿徳之人、尚不能知、況彼沙門瞿曇、既是年少、出家未久、学日又浅、而当能解如斯之義……、年雖幼稚不応軽蔑。大正02 p.453上

③四分律・受戒健度；余有沙門婆羅門耆年出家学久、猶尚不能解此偈義、況此沙門瞿曇、年尚幼稚出家日浅、豈能解耶。復作是念年雖幼稚、亦不可軽、亦有年少出家学道得阿羅漢、神足自由者、……。大正22 p.791上

⑤五分律・受戒法；此六師等年耆博見、尚不能解、況沙門瞿曇既自年少、出家始爾而能解乎。復念……瞿曇雖少不可軽也。大正22 p.106中

[5] 次に後世の仏伝經典資料のいうところを紹介しておく。

[5-1] まず年齢を掲げるものとしては次のものがある。以下は「35歳」とする。

①Nidānakathā；(カーラデーヴァラ仙=阿私陀仙の予言として) 淨飯大王の家系の子で仏の種子であるこの方は、今から35年過ぎて仏になられるであろう (*esa pañca-timsa vassāni atikkamitvā buddho bhavissati*)。Jātaka vol. I p.055

②十二遊經；仏以二十九出家、以三十五得道、從四月八日至七月十五日、坐樹下為一年。大正04 p.146下

③仏本行集經 卷10；從今已去、三十五年、此之童子、必得成於阿耨多羅三藐三菩提。大正03 p.697上

[5-2] 「36歳」とするものもある。

①普曜經 卷2；於是菩薩在胎十月、開化訓誨三十六載諸天人民、使立声聞及諸大乘。
大正03 p.492中

[5-3] 苦行の年数を上げるものもあるがすべて「6年」とする。

①Nidānakathā；大士が6年の苦行をされたことは、あたかも空中に結び目を作ろうとするようなものであった (mahāsattassa chabbassāni dukkarakāriyaṃ karontassa ākāse gaṇṭhikaraṇakālo viya ahosi)。Jātaka vol. I p.067

；彼女 (sujātā) は大士が苦行をして第6年を満じられたとき、ヴェーサーカ月の満月の日に…… (sā mahāsattassa dukkarakāriyaṃ karontassa chatṭhe vasse pari-punne visākhapuṇṇamāya)。Jātaka vol. I p.068

②僧伽羅刹所集經；是時 (五比丘) 語世尊言、汝本六年勤苦学道、日食一麻一米、猶不得道。況今随心口自恣言得道耶。大正04 p.137下

③修行本起經 卷下；六年不傾猗 亦不念飢寒 精進無所著 形瘦骨皮連 汝等修敬意 奉獻於菩薩 現世獲大福 後世受果報。大正03 p.469下

④仏本行集經 卷2 4；於六年中…精勤苦行。大正03 p.767下

⑤仏本行集經 卷2 5；太子苦行已過六年。大正03 p.768上、下、769中
；爾時菩薩六年既滿。大正03 p.771中

⑥太子瑞応本起經 卷上；日食一麻一米、以続精氣、端坐六年、形体羸瘦、皮骨相連、玄清靖漠、寂黙一心……。大正03 p.476下

⑦過去現在因果經 卷3；於尼連禪河側、静坐思惟、觀衆生根、宜応六年苦行、而以度之、思惟是已、便修苦行。大正03 p.638中

⑧普曜經 卷5；菩薩修勤苦行竟六年已。心自念言、雖有神通聖明慧力。今吾以是羸瘦之体、往詣仏樹。大正03 p.511下

⑨方广大莊嚴經 卷7；昔於六年中、示現摧伏彼、勤修大苦行。大正03 p.582上

；爾時菩薩六年苦行、魔王波旬常随菩薩伺求其過而不能得。大正03 p.582中

；菩薩復作是念、六年勤苦衣服弊壞、於屍陀林下見有故破糞掃之衣、將欲取之。大正03 p.583中

；六年修苦行 欲詣菩提場。大正03 p.585中

⑩仏所行讚 卷3；專心修苦行……寂黙而禪思 遂經歷六年……苦形如枯木 垂滿於六年。大正04 p.024中

⑪仏本行經 卷3；於是便至 尼連禪江、修治淨行……如是羸困具滿六年。大正04 p.075上

⑫中本起經 卷下；白淨王太子、入山六年、道成号仏。大正04 p.156上

⑬興起行經 卷上；在於鬱秘地 苦行足六年。大正04 p.164中

；以何因縁在鬱秘地、苦行經六年、謂呼当得仏。大正04 p.164下

⑭興起行經 卷下；我六年苦行者、償先縁対畢也。然後乃得阿耨三耶三菩阿惟三仏耳。大正04 p.173下

⑮衆許摩訶帝經 卷3；(阿私陀仙) 如是觀已得見太子、出彼王城入於山野、年二十九、於其山中六年苦行、証甘露滅成無上道。大正03 p.941上

なお①は引用の文章から知られるように「6年」を「満6年 (chaṭṭhe vasse paripuṇṇe)」と明言しているわけである。⑤の「過六年」「六年既満」も、⑧の「竟六年已」も、⑪の「具満六年」も満6年を示しているものと解釈できる。

[6] 釈尊の成仏年齢について、その他のインド撰述の文献の云うところを紹介する。

[6-1] 次は「35歳」とする。

①鞞婆沙論 卷14；從兜術天終降生母胎、十月已満住林毘園生、即行七歩、二龍浴身二十九出家、三十五得道、六年苦行已。大正28 p.523上

[6-2] 「30歳」とするものもある。

①梵網經 卷10下；(七歳出家) 三十成道。大正24 p.1003下

[6-3] 苦行年数については次のようなものがあり、すべて「6年」とする。

①鞞婆沙論 卷14；從兜術天終降生母胎、十月已満住林毘園生、即行七歩、二龍浴身二十九出家、三十五得道、六年苦行已。大正28 p.523上

②薩婆多毘尼毘婆沙 卷2；爾時五人雖未得戒而剃髮著袈裟与仏相似、六年樹下給侍菩薩時、儀式已爾不適今日。大正23 p.511上

③大智度論 卷1；於泥連禪河側六年苦行、日食一麻或食一米等。大正25 p.058上；到鬱特伽阿羅洛仙人所、現作弟子、而不行其法……而今現修苦行六年求道、菩薩雖主三千大千世界而現破魔軍成無上道。大正25 p.059上

④大智度論 卷3；夜半出家、至漚樓鞞羅國中尼連禪河辺、六年苦行。大正25 p.083下

⑤大智度論 卷4；夜半出家、六年苦行。大正25 p.091中

⑥大智度論 卷9；六年苦行。大正25 p.121下

⑦大智度論 卷15；仏苦行六年。大正25 p.169上

⑧大智度論 卷17；菩薩出家六年苦行……仏六年苦行既満、初成仏時其夜生羅睺羅。大正25 p.182中

⑨觀仏三昧海經 卷2；瞿曇体羸不食故爾、觀其光色如金剛山紫焰流出、恬坐六年心無傾搖、觀其面貌曾無畏色。大正15 p.651上

⑩大般涅槃經(40卷本) 卷21；至樹下具修苦行満足六年。大正12 p.488上

⑪大般涅槃經(40卷本) 卷27；爲破邪見六年苦行。……六年苦行無所剋獲。大正12 p.528中

⑫大般涅槃經(40卷本) 卷39；或時親修苦行六年、或時呵責外道苦行。大正12 p.591上

⑬大般涅槃經(36卷本) 卷19；至樹下具修苦行満足六年。大正12 p.731上

⑭大般涅槃經(36卷本) 卷26；盛年捨欲……出家修道樂於閑寂爲破邪見六年苦行。大正12 p.773上

；六年苦行無所剋獲、即作是言、修是苦行、空無所得。大正12 p.773上

⑮大般涅槃經(36卷本) 卷28；若能具満七年苦行、見猶不多、況所修習不滿六年。大正12 p.789中

⑯大莊嚴論經 卷13；仏世尊於現在世爲衆生六年苦行、日食一麻一米。……如來行苦

行、六年自乾燠…六年行苦行。大正04 p.329上

⑰出曜経 卷7；勤形苦体日進一麻一米六年苦行……菩薩勤苦苦行已經六年。大正04 p.644中

⑱出曜経 卷13；二十九出家、自云六年苦行、云何能成等正覺乎。大正04 p.680中

⑲出曜経 卷14；菩薩苦行六年。大正04 p.686中

⑳雜寶藏経 卷10；悉達菩薩六年苦行、於菩提樹下降伏四魔除諸陰蓋豁然大悟。大正04 p.496中

㉑大般泥洹経 卷6；端坐樹下六年苦行。大正12 p.899上

㉒賢愚経 卷10；不樂在家出家修道、六年苦行得一切智尽結成仏。大正04 p.418下

㉓賢愚経 卷12；不樂国位、踰宮出国、六年苦行。大正04 p.433上

㉔八大靈塔名号経；六年雪山修苦行。大正32 p.773中

なお、⑮は満6年に達していなかったとしている。

[7] 中国撰述の文献の云うところも紹介しておく。

[7-1] 「35歳」とするものはなく、次は「30歳」あるいは「35歳」とする。

①大唐西域記 卷8；是時如來年三十矣或曰年三十五。大正51 p.916中

②釈迦方志 卷上；時年三十者、或云三十五者。大正51 p.962下

[7-2] 「24歳」とするものがある。

①仏祖統紀 卷2；五十年戊寅太子年二十五歳妙樂云。若十九出家、則二十四成道、若三十成道、則二十
五出家。抛寶藏経、二十五出家、三十成道。荆溪之言、有合於此。大正49 p.144上

本文の25歳は出家年齢であって、「24歳成道」は注の中の文章である。しかし注自身が云うように、19歳出家とするならば、24歳成道となるというだけのものであって、尊重するには値しない。

[7-3] 「30歳」とするものがある。

①歴代三宝紀 卷1；年三十二月八日明星出時、朗然覺悟成無上道。大正49 p.023中

②唐護法沙門法琳別伝 卷中；（周第六主穆王諱滿二年癸未二月八日）、仏年三十成道、故普曜経云、菩薩明星出時豁然大悟。大正50 p.207中

③仏祖統紀 卷2；今以如來八十寿除五十説法、則定取梵網・無相三昧・寶藏経等、三十成道之言。大正49 p.145上

[7-4] 苦行年数については次のようなものがある。すべて「6年」とする。

①釈迦譜 卷1；爾時太子調伏阿羅邏迦藍二仙人已……宜応六年苦行而以度之、思惟是已、便修苦行。大正50 p.030中

②妙法蓮華経玄義 卷7之下；（太子）六年苦行。大正33 p.768下

③大唐西域記 卷7；太子六年苦行。大正51 p.906中

④大唐西域記 卷8；勤求六歳……捨苦行。大正51 p.915上
；苦行六年。大正51 p.917中

⑤大唐西域記 卷9；苦行六年証三菩提具一切智。大正51 p.920下

⑥釈迦氏譜；太子調伏二仙人已……尼連河側静慮六年度苦行者……將滿六年不得解脱。
大正50 p.091中

⑦釈迦方志 卷下；苦行六年。大正51 p.963上

⑧仏祖統紀 卷2；日食一麻一米以続精気端座六年。大正49 p.144下

；穆王四年癸未太子心自念言、我今修於苦行垂滿六年……。大正49 p.145上

[8] 上記のように、原始聖典は釈尊の成道を35歳とするイメージを有していたものと想像される。これを仏伝經典も継承しているが、中国撰述資料になると、30歳、35歳、24歳といった説が錯綜するようになる。しかし中国撰述資料では、圧倒的多数は出家年齢を19歳とし、苦行を6年とする。これによれば成道は25歳とならなければならないわけだが、それが存在しないのは不思議である。おそらく25歳説は原始聖典はもちろん、仏伝經典やインド撰述文献にも見られないのであるから、それを表立って主張できなかったであろう。

【4】 釈尊の入滅年齢に関する資料

[1] まず釈尊の入滅年齢に関する原始仏教聖典資料を検討する。

[1-1] 原始聖典において、釈尊の入滅年齢を伝える場面は大きく分けて3種に分かれる。1つは沙羅双樹における釈尊の入滅場面であり、もう1つはそれに先立つ悪魔に促されて3ヶ月後に入滅すると宣言する直前に、ヴェーサーリで雨安居に入られたときの阿難に向かって年を取ったことを述懐する場面、そしてもう1つは釈尊に先立って入滅した舍利弗・目連その他の入滅に関わる場面である。

[1-2] これらの時間的経過を推測すると次のようになる。

後に考察する事柄であるが、釈尊の入滅をヴェーサーリカ月の満月の日であるとしておこう。これは【論文2】で考察したように、中国暦の2月15日に相当する。

これに先立つ約3ヶ月前に釈尊は悪魔に促される形で、3ヶ月後に般涅槃をすることを宣言された。これはチャーパーラ・チエーティヤで休息されて、阿難に望むならば一劫でも生存できると示唆されたにも拘らず、阿難は悪魔に妨げられて更に生きることを懇願しなかったため、悪魔に「波旬よ、黙せよ、久しからずして如来は般涅槃するであろう。如来は今から3ヶ月経って、般涅槃するであろう」(apossuko tvaṃ Pāpima hoti, na ciraṃ tathāgatassa parinibbānaṃ bhavissati, ito tiṇṇaṃ māsānaṃ accayena tathāgato parinibbāyissati)と告げられた。そしてさらにヴェーサーリの近辺に住していた比丘達を招集して再び宣言された。これが入滅の2月15日に先立つちょうど3ヶ月前であるとする、これは11月の15日のことということになる。「仏所行讚」はこれを「雨安居の後に」⁽¹⁾とっており、おそらくこれは竹林村での雨安居を終えられた後のことであろう⁽²⁾。

釈尊はその前にヴェーサーリの近郊の竹林村で雨安居に入られた。そのときヴェーサーリは飢饉で、大人数の比丘たちが雨安居を過ごすことができなかつたので、比丘たちに縁者・知友を頼って分散して雨安居を過ごせと指示され、釈尊は阿難と二人で竹林村で雨安居を過ごされた。そのとき釈尊は阿難に年老いたことを慨嘆された。雨安居は4月16日から7月15日までであるから、その間のことであるとして、これを仮に6月15日であるとする、

入滅の8ヶ月前ということになる。

釈尊はこの最後の旅を王舎城の霊鷲山から始められているが、舍利弗・目連その他に関わる記事の多くは後述するように舎衛国を舞台としている。もしこれが「涅槃経」のシーンにつながる直前のことであるとすれば、おそらくヴェーサーリでの最後の雨安居の前の年の雨安居は王舎城もしくは祇園精舎でなされたであろうと考えられる。もしこれを祇園精舎で過ごされたとすると、少なくともこれは入滅の1年8ヶ月ほど前ということになる。

釈尊は雨安居の後しばらくを夏の大祭として弟子たちに接見する期間に充てられるのが常であったから、祇園精舎で雨安居を過ごされた釈尊は、祇園精舎を出発して王舎城に到着され、そこでしばらく過ごされてから、パーティプトラでガンジス河を渡られ、ヴェーサーリに到着して、4月6日に竹林村で最後の雨安居に入られたということになる。しかしヴェーサーリには雨安居に入られる少なくとも1ヶ月前には、春の大祭のために到着されていたであろう。

このような旅程をとられたものと仮定すると、後安居の1ヶ月後の9月15日ころに舎衛城を出発された釈尊は、いったん王舎城に立ち寄られてから、すぐに出発して翌年の3月15日ころにはヴェーサーリに到着されたということになる。その間わずか6ヶ月である。しかしすでに老齢になっていた釈尊にはこの日程はいかにもきついという気がしないでもない。事実竹林村で雨安居を過ごされて後、沙羅双樹のところまで3ヶ月を要されているのである。舎衛城から王舎城、王舎城からヴェーサーリまでの距離は、おそらく竹林村から沙羅双樹までの距離の少なくとも5、6倍はあるであろう。それを6ヶ月ではいかにも強行日程すぎよう。

したがって王舎城でも雨安居を過ごされて、最後の旅に出立されたということも十分に推測できる。『増一阿含』26-9は舎衛国の祇園精舎におられた世尊が、夏安居を過ごすために舍利弗や目連などを引き連れて王舎城に行き、そこで夏坐を終わった時のこととして、目連・舍利弗の入滅に関連して、舍利弗が「釈迦文仏終不住一劫。又復諸天来至我所、而語我言、釈迦文仏不久在世年向八十、然今世尊不久当取涅槃」と語っている⁽³⁾。したがってこれによれば、釈尊は王舎城で雨安居を過ごされたあと、最後の旅に出立されたことになる。ということになれば、舍利弗・目連などとの関わりで語られる祇園精舎での出来事は2年8ヶ月も前であったこととなる。

一応このような時間的経過を予想して、以下に原始聖典の釈尊入滅年齢資料を紹介する。

(1) 「仏所行讃」巻5 大正04 p.043下、梶山「ブツダチャリタ」23-62 p.261参照

(2) 釈尊が3ヶ月後に入滅すると宣言されたのは、雨安居期間中ではないであろう。釈尊は雨安居に入られたときには寿命を捨てられずに留められたから、その時には入滅の決心をされなかったわけである。しかるに釈尊が3ヶ月後に入滅すると宣言されたのは、いったん留められた寿命を捨てることを決心されたからであって、この間にはそれ相応の時日が経過していたものと考えられる。

また最初に悪魔にこの宣言をされたのは、乞食に出られた後のチャーパーラ・チャイティヤにおいてであって、もし雨安居中であれば遠出はできなかったはずである。もっともこのチャイティヤは竹林村に近いところで、釈尊自身の雨安居中の乞食に支障はなかったとしても、ヴェーサーリに比丘たちを集めることは律の規定に抵触したであろう。したがってこの宣言は雨安居を終わった後のことでなければならない。

(3) 大正02 p.640上

[2] 釈尊の入滅に先立って般涅槃した舍利弗・目連などの般涅槃に関わる場面で記された釈尊の年齢記事には次のようなものがある。

[2-1] 以下は「80歳」とする。

- ①MN. 89 Dhammacetiya-s. ; (釈迦国Sakkaの彌婁離Medaḷumpaにおいて波斯匿王の言として) 世尊も80歳、我もまた80歳である (bhagavā pi āsitiko ahaṃ pi āsitiko) 。 vol. II p.124
- ②MN. 12 Mahāsihanāda-s. ; 舍利弗よ、私は年若い、老衰し、高齢で、人生の終わりに達し、齢傾いてすでに80である (ahaṃ kho pana Sāriputta etarahi jinno vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto , āsitiko me vayo vattati) 。 vol. I p. 082
- ③中阿含213 法莊嚴經 ; (釈迦国Sakkaの彌婁離 Medaḷumpaにおいて波斯匿王の言として) 我年八十、世尊亦八十。大正01 p.797中
- ④増一阿含26-9 ; (舍利弗、目連の言として) 釈迦文仏不久在世、年向八十。然今世尊不久当取涅槃。我今不堪見世尊取般涅槃 (1) 。大正02 p.640上
- ⑤増一阿含41-5 ; (迦葉、阿難に法を付嘱して) 吾今年老、以向八十。然如来不久当取滅度。大正02 p.746中

(1) 「年向八十」は80歳になろうとしているという意味か。

[2-2] 次は「80余」とする。

- ①増一阿含26-6 ; (祇樹給孤独園において阿難に) 今日如来年已衰微、年過八十 (1) 。大正02 p.637上
- ②増一阿含48-3 ; 吾今年已衰耗。年向八十余 (2) 。大正02 p.789上

(1) 舞台は舍衛城であり、波斯匿王が登場する。ここでは「年過八十」とするが、これは「年過ぎて八十」とでも訓読すべきかもしれない。あるいは「80歳を過ぎた」と読むとしても、81歳、82歳になったという意味ではないであろう。

(2) この経は舍衛国の祇園精舎におられた釈尊が、阿難の将来仏の彌勒についての質問に答える下りで、釈尊が大迦葉に「吾今年已衰耗、年向八十余」といわれている。「年向八十余」は「年は八十に向かいて余あり」と読むべきかもしれない。ここには大迦葉比丘・君屠鉢漢比丘・賓頭盧比丘・羅云比丘の四大声聞は「要不般涅槃、須吾法没尽、然後乃当般涅槃」という記述もあるから、舍利弗・目連の入滅が予想されているのであろう。そして釈尊は迦葉に「般涅槃すべからず、……摩竭国界の毘提村の中、大迦葉は彼の山中に於て住せよ」と命じられる。

[3] 釈尊の3ヶ月後に入滅すると宣言する直前の、ヴェーサーリでの雨安居の場面に記されている年齢記事には次のようなものがある。すべて「80歳」とする。

- ①DN. 16 Mahāparinibbāna-s. ; 阿難よ、私は年若い、老衰し、高齢で、人生の終わりに達し、齢傾いてすでに80である (ahaṃ kho pan'Ānanda etarahi jinno vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto , āsitiko me vayo vattati.) 。 vol. II p.100
- ②長阿含2 遊行經 ; 吾已老矣年粗八十。大正01 p.015中
- ③白法祖記 ; 仏般泥洹經 ; 今仏年已尊且八十。大正01 p.164下

- ④失訳；般泥洹經；我亦已尊、年且八十。大正01 p.180上
- ⑤Mahāparinirvāṇasūtra；さらに、アーナンダよ、人格完成者は、もう古い朽ち、歳を重ねて80歳となった。譬えば、古ぼけた車が二つの車輪によってやっと動いて行くように、私は人格完成者は古い朽ち、歳を重ねて80歳となり、二つの車輪によってやっと動いて行くのだ (punar aparam Ānanda tathāgato vṛddho jīrṇatām prāpto 'sītike vayasi vartate dvaidhānīśrayeṇa yāpyate tadyathā jīrṇaṃ śakatam dvaidhānīśrayeṇa yāpyate evam eva tathāgato vṛddho jīrṇatām prāpto 'sītike vayasi vartate dvaidhānīśrayeṇa yāpyate)。p.198
- ⑥SN. 47-9；私は年老い、老衰し、高齢で、人生の終わりに達し、齡傾いてすでに80である (etarahi kho panāhaṃ jīṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto, asītiko me vasso vattati.)。vol. V p.153
- ⑦根本有部律・雜事；年将八十。大正24 p.387中

[4] 釈尊の沙羅双樹の下での入滅場面に記されている入滅年齢資料には次のようなものがある。

[4-1] 年齢を明示するものは次の2点のみであって、2点ともに「79歳」とする。

- ①白法祖訳 仏般泥洹經；年亦自至七十有九。大正01 p.172下
- ②失訳 般泥洹經；「自我為聖師、年至七十九」大正01 p.188中

[4-2] 各種異訳の大般涅槃經によって、これまでの記述を表にすると次のようになる。

場所	パーリ	遊行經	白法祖	失訳	法顯	S k t.
竹林村	80歳となった	吾已老矣年粗八十	今仏年已尊且八十	年且八十		80歳となった
Cāpāla-cetiya	三月の後般涅槃	是後三月当取滅度	却後三月当般涅槃	是後三月当般涅槃	却後三月当般涅槃	3ヶ月過ぎて後に般涅槃
重閣講堂	三月の後般涅槃	是後三月当般涅槃	却後三月当般涅槃	仏後三月当般涅槃	却後三月当般涅槃	
ヴェーサーリーを振り返って			我今日寿竟	吾今夜半当般涅槃		
沙羅双樹	今夜最後更に般涅槃せん		我今夜半当般涅槃		今日於後夜分入般涅槃	今夜中間の時刻に
Subhaddaに	29歳出家 51年遊行	我年29歳出家 我成仏今 已50年	得仏説經49歳	昔我出家十有二年 道成得 仏開説經法但 50載	29歳出家 三十有六成道	29歳出家 出家後50年 余
沙羅双樹	夜最後更に般涅槃	般涅槃	年自至七十有九	年至七十九		
沙羅双樹		2月8日	4月8日	4月8日		

[5] 出家年齢と入滅までの年数を示すものがある。これを加算すれば入滅年齢となるわけである。もっとも出家年齢に異説があるのであるから単純ではないが、とにかくそれは無視して出家から入滅までの年数を記す資料を掲げる。

[5-1] 以下は「50年」とする。

①長阿含2 遊行経；我年二十九 出家求善道 須跋我成仏 今已五十年 戒定智慧行 独処而思惟 今說法之要 此外無沙門。大正01 p.025中

②失訳 般泥洹経；昔我出家、十有二年、道成得仏、開説経法、但五十載。大正01 p.187下

③別訳雑阿含110；三十一出家 爾来過五十 推求諸善法 戒定行明達 一切諸世間 不知実方所 況知実法者 若修八正道 能獲於初果 乃至第四果 若不修八正 初果不可知 況復第四果 我於大衆中 説法師子吼 如此正法外 亦無有沙門 及与婆羅門。大正02 p.413下

ただし①③の「已五十年」「過五十」は、次項で紹介するパーリの“Mahāparinibbāna-s.”やサンスクリットの“Mahāparinirvāṇasūtra”が‘vassāni paññāsa-samādhikāni’ ‘pracāśad varṣāni samādhikāni’ とするように「50年余」という意味であるとも考えられる。また、①は「我成仏今已五十年」とし、②は「道成得仏、開説経法、但五十載」とするから、成仏してから50年と読めなくもない。しかし①は出家を29歳、③は31歳とするのであるから、苦行を6年とすると、成仏は35歳、37歳となることとなり、もし50年を成道からの年数とすると、入滅は85歳、87歳とならなければならない。これは不合理であるから、出家からの年数と判断した。

[5-2] 以下は「50年余」とする。

①DN. 16 Mahāparinibbāna-s.；私は29歳で善を求めて出家した。スバッドよ、私は出家してから50余年、正理正法の地を遊行した (ekūnatimso vayasā Subhadda, yaṃ pabbajim kiṃ-kusalānuesī . vassāni paññāsa-samādhikāni, yato ahaṃ pabbajito Subhadda, ñāyassa dhammassa padesa-vattī) vol. II p.151

②Mahāparinirvāṇasūtra；私は29歳で善を求めて出家した。出家してから50年余となった (ekonatriṃśo vayasā Subhadra yat prāvrajaṃ kiṃ kuśalaṃ gaveśī, pracāśad varṣāni samādhikāni yataś cāhaṃ pravrajitaḥ Subhadra) 。 p.376

③雑阿含979；始年二十九 出家修善道 至道至於今 経五十余年 三昧明行具 常修於浄戒 離斯少道分 此外無沙門。大正02 p.254中

④根本有部律・雑事；我年二十九 出家求善法 又五十余年 専行戒定慧 一心無散乱 唯求於正理 除斯真法外 無別有沙門。大正24 p.396下

[5-3] 以上のように原始聖典は出家から入滅までの年数を50年あるいは50年余とする。[5-1]の③は出家を31歳とするが、他のすべての原始聖典は出家年齢を29歳とするのであるから、「80歳入滅」をイメージしていたことは間違いなからう。

[6] 成道から入滅までの年数を掲げるものがある。

[6-1] 「49年」とする。

①白法祖訳 仏般泥洹経 卷下；得仏説経四十九歳。大正01 p.171中

；開化導引四十九年。p.171下

②失訳 般泥洹經 卷下；自我得仏、四十九歳。大正01 p.187上

[6-2] これは[5-1]でも考察したように、出家からの年数とも考えられる。しかしこの文章からはそうは読めない。ただし『失訳』は[5-1]の②において紹介したように、出家から50年とも理解されうる。苦行が1年という伝承はないから、成道から49年というのは不思議である。しかしこれは出家から成道までを12年とし、入滅を79歳とするから、19歳出家、足掛け12間の修行の後に30歳成道、成道から49年間説法されて、79歳入滅というイメージは成り立つ。

しかし【3】で述べたように、原始聖典の持つ共通のイメージは出家29歳、成道35歳であった。したがってこの共通イメージと以上の資料から導かれる出家19歳、成道30歳は齟齬を来す。そこで思い出されるのが、[5-1]に紹介した『長阿含經』の「遊行經」と『失訳・般泥洹經』の文章である。これらは「我年二十九 出家求善道 須跋我成仏 今已五十年」あるいは「昔我出家、十有二年、道成得仏、開説經法、但五十載」とするのであって、一見するところ成道から入滅までを「50年」としているように読めなくはない。しかしこれに相当するパーリ本やサンスクリット本は明らかに出家してからの年数であって、成道してからの年数とは読めない。したがって先の文章は「私は29歳で出家してから善道を求め、成道して、已に50年を経過した」と読むべきであろう。しかしここに紹介した資料は、これをつい成道から50年と解してしまったのではなかろうか。

[7] 仏伝經典には不思議なことに、仏滅年齢について言及するものは見いだせなかった。おそらく仏伝經典が、釈尊の一生をカバーするのではなく、途中で終わっているからであろう。

[8] 仏滅年齢に関するインド撰述文献には次のようなものがある。

[8-1] すべて「80歳」である。

①金光明最勝王經 卷1；壽命短促方唯八十年…壽命如是唯八十年。大正16 p.404下

；壽命短促惟八十年…壽命短促唯八十年。大正16 p.405上

②大智度論 卷9；在世八十余年。大正25 p.125上

③八大靈塔名号經；如是八十年住也。然後牟尼入涅槃。大正32 p.773中

[8-2] 出家から入滅までの年数についていうものがある。「50年」とする。

①大智度論 卷3；我年一十九 出家学仏道 我出家已来 已過五十歳 淨戒禅智慧

外道無一分 少分尚無有 何況一切智。（これは須跋陀に対する説法であり、入滅時の場面である）大正25 p.080下

②尊婆須蜜菩薩所集論 卷10；（広説如雜阿含）二十九修跋陀人、我出家行学道、我已知五十歳。於中学修跋陀。大正28 p.803下

しかし①は出家を19歳とするから、これからすると入滅は69歳となり不合理である。

[8-3] 成道から入滅までの年数をいうものがある。「45年」である。

①Mahāvamsa；五種の眼を持つ、比類ない勝者は45年の間活動されて（pañcaccattāli-sa……thatvā）、世間のすべての事柄をすべての方法でなしおわって、クシナーラー

の沙羅双樹の間のよい場所で、ヴェーサーカ月の満月の日に（vesākha puṇṇamāyaṃ）
世間の灯は般涅槃された。Ⅲ-1~2 p.016

②善見律毘婆沙 卷1；世尊得阿耨多羅三藐三菩提、乃至涅槃時、於一中間四十五年。
大正24 p.675中

[9] 仏滅年齢に關説する中国撰述文献には次のようなものがある。

[9-1] 以下は「80歳」とする。

①大唐西域記 卷6；生年八十吠舍佉月後半十五日…三月十五日也、…迦刺底迦月後半
八日…九月八日也。大正51 p.903中

②仏祖統紀 卷2；今以如来八十寿除五十説法、則定取梵網・無相三昧・宝蔵経等、三
十成道之言。大正49 p.145上

[9-2] 以下は「79歳」とする。

①釈迦譜；（雙卷大般泥洹経云）自我為聖師至七十九。大正50 p.072上

②歴代三宝紀 卷1；如来在世七十九年。大正49 p.023中

③唐護法沙門法琳別伝 卷中；（周穆王五十二年壬申之歳二月十五日）仏年七十九方始
滅度、故（涅槃経）云…。大正50 p.207中

④釈迦氏譜；（雙卷泥洹云）我為聖師至七十九、所応作者並已究暢……。大正50 p.09
4上

[9-3] 「82歳」とするものがある。

①妙法蓮華経玄義 卷7下；棄国捐王六年苦行、三十四心断結成道、八十二歳老比丘身、
詣純陀舍持鉢乞食、食檀耳羹、食訖説法、果報寿命中夜而尽入無余涅槃。大正33 p.
768下

；仏父母生身、八十二尽、身灰智滅畢竟不生。大正33 p.769上

[9-4] 成道から入滅までの年数を「49年」とするものがある。

①歴代三宝紀 卷1；四十九年……説法教化。大正49 p.023中

[9-5] 成道から入滅までを「50年」とするものがある。

①大唐西域記 卷9；御世垂五十年。大正51 p.921上

②仏祖統紀 卷2；今以如来八十寿除五十説法、則定取梵網・無相三昧・宝蔵経等、三
十成道之言。大正49 p.145上

[9-6] 成道から入滅までを49年あるいはあるいは50年とする伝承は、白法祖と失訳
の『泥洹経』に基づいたものであろう。しかしそれが不合理であることはすでに述べた。し
かしこれが独り歩きし始めたことによって、中国では19歳出家説が定着してしまったので
はなかろうか。

[10] 以上紹介してきたように、原始聖典は釈尊入滅よりも1年半ないし2年半も前のこ
とであったと考えられる舍利弗・目連の般涅槃に關連する場面でも、入滅前8ヶ月ほどの竹
林村での雨安居の場面でも、沙羅双樹の入滅場面でも、釈尊の年齢を等しく80歳とする。
本来ならば78歳とか79歳とされなければならないところである。中には沙羅双樹の入滅
場面での釈尊の年齢を79歳とする白法祖訳あるいは失訳の『般泥洹経』のような例もある

がこれは例外である。

また成道から入滅までの年数を49年ないし50年とするものがあるが、成道を30歳としなければ辻褄が合わない資料がある。しかしこれは出家からの年数が誤り伝えられたものと想定しておいた。

中国撰述の文献には成道を30歳とするものがあり、出家については19歳とするものが多いが、先述したように成道から入滅までの年数を49年あるいは50年とする誤った解釈に基づいたものと考えられる。あるいは出家年齢が29歳では遅すぎるという、中国の文化的背景があったとも考えられる。

【5】出家・成道・入滅年齢に関する伝承系統

[1] 以上、釈尊の出家・成道・入滅年齢について、原始聖典・仏伝経典・インド撰述文献・中国撰述文献のいくつかを紹介しつつ若干のコメントを付してきた。これをそれぞれの文献を一つの単位として表にして取りまとめておこう。

パーリ聖典には“Nidānakathā” “Mahāvamsa”なども含めた。また中国撰述文献のうち経の引用については省略した。

[1-1] 原始聖典資料

文献名	出家年齢	苦行年数	成道年齢	出家－ 入滅	成道－ 入滅	入滅年齢
パーリ聖典	29	6 7	35	50余	45	80
長阿含経	29			50	(50)	80
中阿含経	29					80
雑阿含経	29			50余	50余	
増一阿含経	29	6	35			80 80余
別訳雑阿含	31			過50		
Mahāparinirvāṇasūtra	29			50余		80
法顕・涅槃経	29		36	50余		
失訳・般泥洹経		12		50	(50) 49	80 79
白法祖・泥洹経					49	80 79
四分律		6				
僧祇律		6 7				

根本有部・苾芻		6				
根本有部・苾芻尼		6				
根有有部・出家事	2 9	6				
根本有部・雜事	2 9	6		5 0 余		8 0
根本有部・破僧事	1 9	6				

[1-2] 仏伝經典

文献	出家年齢	苦行年数	成道年齢	出家－ 入滅	成道－ 入滅	入滅年齢
修行本起經	1 9	6				
中本起經		6				
太子瑞応本起經	1 9	6				
普曜經		6	3 6			
興起行經		6				
仏本行集經		6	3 5			
Mahāvastu	2 9					
十二遊經	2 9		3 5			
仏所行讚		6				
仏本行經		6				
過去現在因果經	1 9	6				
方廣大莊嚴經		6				
僧伽羅刹所集經		6				
衆許摩訶帝經	2 9	6				

[1-3] インド撰述文献

文献	出家年齢	苦行年数	成道年齢	出家－ 入滅	成道－ 入滅	入滅年齢
善見律毘婆沙					4 5	
薩婆多毘尼毘婆沙		6				
尊婆須蜜所集論	2 9			5 0		
轉婆沙論	2 9	6	3 5			
大智度論	2 9	6		5 0		8 0 余

摩訶摩耶経	19					
観仏三昧海経		6				
大乘・般泥洹経		6				
40・36巻涅槃経		6				
金光明最勝王経						80
出曜経	29	6				
大莊嚴経		6				
雜宝蔵経		6				
賢愚経		6				
八大霊塔名号経	29	6				80
梵網経	7		30			

[1-4] 中国撰述文献

文献	出家年齢	苦行年数	成道年齢	出家— 入滅	成道— 入滅	入滅年齢
釈迦譜	19	6				79
歴代三宝紀	19		30		49	79
法華玄義		6				82
法琳別伝	19		30			79
大唐西域記	19 29	6	30 35		50	80
釈迦氏譜	19	6				79
釈迦方志	19 29	6	30 35			
仏祖統紀	25	6	30		50	80

[2] 以上さまざまな伝承を紹介し表示したが、それぞれのレベルの資料を分析してみよう。

[2-1] 原始聖典資料に関しては、出家を29歳とし、成道を35歳、入滅を80歳とする伝承が最大公約数的な伝承であるということが出来る。したがって本総合研究では、上記を基準とすればそれでよいのであるが、念のためにそれ以外の伝承について一瞥しておこう。

[2-2] まず不合理な伝承がある。『長阿含経』と『雜阿含経』は出家から入滅までと成道から入滅までの年数を共に50年あるいは50年余とするが、これは出家と成道が同じ年としないかぎり理に合わない。これはすでに【4】の[6-2]において指摘した通り、出家から入滅までの年数が、成道から入滅までの年数と誤解されたことによって生じた誤りであ

と思われる。

そしてもしこの推測が許されるなら、上記の表では情報量が少ないから、不合理性は見いだされないが、『失訳・般泥洹経』と『白法祖訳・泥洹経』の成道から入滅までの50年あるいは49年もおかしい。

また『別訳雑阿含』の出家の31歳も不合理の部類に属する。これによれば出家から入滅までを「過50」とするから、入滅は少なくとも81歳にならなければならないが、そのような伝承は少なくとも原始聖典にはないからである。満年齢と数え年齢とでは最大2歳の差が生じるから、したがって31歳は満29歳の数え年齢という可能性もなくはないが、普通なら30歳となるであろう。『失訳・般泥洹経』と『白法祖訳・泥洹経』の成道から入滅までの49年に連なるかも知れないが、これは成道からの年数であって、出家からの年数ではないから、厳密にはこれとも関係がないこととなる。

[2-3] 不合理ではないが特異な伝承がある。出家年齢に関する『根本有部律・破僧事』の19歳である。しかし不合理でないのは情報量が少ないからであって、これも苦行年数を6年とするから、成道25歳という伝承が存在しないかぎり成立しない。もちろん『根本有部律』の他の文献にもそういうものは存在しない。また仮にそういうものがあっても、そうすると出家から入滅までは60年余、成道から入滅までは55年とならなければならない。しかし他の『根本有部律』もこういう伝承を持たない。そもそも他の『根本有部律』文献は出家年齢を29歳とするのであるから、おそらく29歳が19歳と誤記されたにすぎないであろう。

『失訳・般泥洹経』と『白法祖訳・泥洹経』の入滅79歳も特異である。しかも79歳は沙羅双樹下での入滅に際していわれ、これを遡ること8ヶ月ほど前の竹林村での雨安居の時点では80歳とするのであるから奇妙である。もしこうした矛盾が自覚されたうえでのことであるとすれば、79歳は「満年齢」で、80歳は「数え年齢」という可能性もあるが、これについての議論は後に譲る。

また『失訳・般泥洹経』の苦行12年も特異である。後に増加して、中国撰述文献では大勢を占めることとなった19歳出家説に関係するかもしれない。もしそうなら成道は31歳ないしは数えで30歳となって、成道から入滅までの年数の50年、49年と合致することとなる。しかし後述するように、19歳出家説をとるインド撰述文献も中国撰述文献も苦行については6年とするのであるから、これにしたがったものでないことは明らかである。

[3] 仏伝經典の整理と分析に入る。

[3-1] そもそも仏伝經典には入滅に関する情報がなく、情報量が少ないが故に不合理な点はない。

[3-2] 仏伝經典伝承の特異点は出家年齢を19歳とするものが増えている点である。しかしこれらもすべて苦行年数を6年とするのであるから、もしそうなら計算上成道は25歳にならなければならないが、25歳成道説は原始聖典はもちろん仏伝經典にも見いだされないから、不合理な数字といわなければならないであろう。

『普曜経』は成道年齢を36歳とするが、これは「数え年齢」と「満年齢」の相違であるかもしれない。

[4] インド撰述文献の整理と分析に入る。

[4-1] これも情報量が少ないから、不合理なものはない。合理的なものは29歳出家、6年苦行、出家から入滅までを50年とし、入滅を80歳余とする『大智度論』と、29歳出家、6年苦行、35歳成道をいう『鞞婆沙論』である。

[4-2] 特異な伝承は7歳出家、30歳成道とする『梵網経』であるが、これによれば苦行は23年となり、むしろ不合理というべきである。

19歳出家をとるものはわずかに『摩訶摩耶経』のみであるが、前述のように25歳成道、出家から成道まで61年、成道から入滅まで55年という伝承がないかぎり、成立しない。

[5] 中国撰述文献を検討する。

[5-1] 不合理な伝承は『大唐西域記』と『釈迦方志』の1説である19歳出家と30歳成道の伝承である。しかし両者とも苦行を6年とするから、計算上は成道は25歳にならないからこの伝承は成立しない。

また6年苦行を前提とすると、計算上は出家29歳、成道35歳が合理的であるが、もしこれをとるとすれば、『大唐西域記』の成道から入滅までの年数50年は矛盾を来す。単純な計算では入滅は85歳にならないから、入滅は一般的伝承にしたがって80歳とするからである。したがってもし50年を尊重するなら、成道は30歳でなければならないわけであるが、成道30歳はどの出家年齢をとっても成立しない。

[5-2] 中国文献ではむしろ出家年齢を19歳とするものの方が多数派であるが、いずれの伝承も苦行を6年とするのであるから、成道は25歳とならなければならないが、そういうものはない。したがって19歳出家説は合理的に説明できない。

原始聖典の19歳説としては『根本有部律・破僧事』があるのみである。もしこれが誤写でないとしても、これは義浄によって唐の久視元(700)年から景雲2(711)年に訳されたものであって、すでに『釈迦譜』『大唐西域記』『釈迦氏譜』などは著された後である。したがってこれが誤写でなく意図的になされたものだとすれば、むしろすでに成立していた19歳出家伝承に影響されたものと考えざるを得ない。

もしそうだとすると、むしろ問題は原始聖典に根拠のない19歳出家説がなぜ中国において定着してしまったのかということである。仏伝經典にすでに19歳説が現れるから(ただし他のインド撰述の文献には19歳説はごく少数しか見られない)、それに基づいたといえればそれまでであるが、それでは中国に翻訳された仏伝經典がなぜ19歳説を採用しなければならなかったかということが問題となる。

その拠り所となったと想像される伝承が『失訳・般泥洹経』である。これは失訳であるがゆえに翻訳年代が不明であるが、宇井伯寿博士は支謙の翻訳と推定され、中村元博士はたといそれが崩れたとしても、漢訳相当経の中ではもっとも古いとされている⁽¹⁾。これは成道から入滅までを50年あるいは49年とするから、成道年齢は30歳というイメージを持っていたことが想像される。そしてさらにこれは苦行を12年とするから、これを足掛け12年とすると、出家は19歳ということになる。したがって漢訳仏伝經典のあるものがこれにしたがって出家を19歳とし、それが中国において定着したということが考えられる。

しかしこれは苦行12年が前提とならなければならないが、仏伝經典にも中国撰述の文献

にも苦行を12年とするものはなく、すべて6年とする。これでは成道25歳伝承がなければならぬがそういうものもない。またたといそういうものがあつたとしても、それなら成道から入滅までは55年とならなければならないから、これは『失訳・般泥洹経』の50年あるいは49年と齟齬を来す。

このように出家を19歳とする伝承は明らかな矛盾を含んでいる。もちろん多くの原始聖典の伝承とも合致しない。このような矛盾を犯してまでして、なぜ中国では19歳出家説が定着したのか謎である。29歳出家では不都合な点でもあつたのかと思われるほどである。想像をたくましくするなら、男子の本懐を遂げるために事を起すにしては29歳は遅すぎるという儒教的背景があつたのであろうか⁽²⁾。

(1) 『ブッダ最後の旅』(岩波文庫 1980.6) pp.319~320

(2) 中村元博士は『失訳・般泥洹経』の特徴を、「漢訳者が儒教的世界観を以て相当に潤色していると考えられる」とされている。p.320

[5-3] 中国撰述の文献としては、『仏祖統紀』の出家25歳、苦行6年(足掛け)、成道30歳、成道から入滅までの年数50年、入滅年齢80歳が計算上はもっとも合理的である。しかしこれは苦行6年、入滅80歳という動かしがたい数字を土台として、中国的な伝承の成道30歳、成道から入滅まで50年という数字を合理的に解釈するとすれば、出家は25歳でなければならないという計算上の要請によって導き出されたもので、出家25歳という古伝承がないかぎり成立しない。もちろん原始聖典はもちろん、いかなる仏伝経典、インド撰述文献にも出家25歳説はないから、それこそ机上の空論と称さなければならない。

[6] 以上、釈尊の出家・成道・入滅の年齢に関するさまざまな伝承を検討してみたが、本研究の取るべき態度を変更する必要がないことはいうまでもない。すなわち、パーリと主要な漢訳4阿含(長阿含・中阿含・雜阿含・増一阿含)が共通する、出家を29歳、成道を35歳、入滅を80歳とする伝承は、我々の資料論でいう「第1次水準資料」ということができるからこれを採用する。

その他の諸伝承は矛盾を孕むものが多く、たといそうはいえなくとも特殊な伝承であるに違いはない。したがって本研究ではそれらを採用しない。

【6】満年齢か数え年齢か

[1] 前節までの考察に際して所々に述べたように、釈尊の出家・成道・入滅年齢についての伝承が錯綜する一つの原因は、諸種の文献が年齢を記述する際に「満」と「数え」を必ずしも厳密に使っていないためもあると考えられる。しかし「満年齢」と「数え年齢」では最大2歳の誤差を生じるのであるから、おろそかにはできない。

次号モノグラフに掲載予定の論文「年齢の数え方について」で詳しく考察するけれども、古代インドの年齢の数え方はおおよそ「満年齢」を採用していたと考えられる。したがってここでも原則としては、「満年齢」が採用されていたと考えて差し支えないであろう。

[2] しかしこれは古代インドの風習ということであって、諸種の文献が常に「満年齢」にしたがっていたという保証はない。ましてここでは漢訳文献も用いており、漢訳者が中国の風習にしたがって「数え年齢」に換算したということも十分にありうる。そうとするならば、極端に言えば一つ一つのケースごとに検討が必要ということになる。

必ずしも十分な資料が残されているわけではないが、可能なかぎり考察してみよう。

[3] 分かりやすいのは苦行年数である。【3】の [2-2]、および [5-3] の“Nidāna-kathā”についてのコメントにふれたように、苦行年数は「満年数」で示せば「6年」、
「数え（足掛け）」で示せば「7年」となる。漢巴共通して伝える年数は「6年」であって、これは「満」で示されたものと考えてよい。

[4] また成道の35歳について次のように表現されているものもある。

「今から35年過ぎて仏になられるであろう (*esa pañcatim̐sa vassāni atikkamitvā buddho bhavissati,*)」 “Nidānakathā” Jātaka vol. I p.055

「過ぎて (*atikkamitvā*)」は明らかに「満」を表したものであることができるであろう。『法頭・涅槃経』と『普曜経』は成道を36歳とするが、これは「数え」の数字であろう⁽¹⁾。ということになれば成道の「35歳」は「満年齢」ということになる。

(1) 『法頭・涅槃経』は出家を29歳とするから、もし36歳を「数え」と考えるなら、こちら
も「数え」としなければならぬかもしれない。もし29歳が「満」なら36歳も「満」となるが、そうすると苦行は「7年」となる。これも不合理であるから、とりあえず36歳は「数え」であると考えておく。

[5] 苦行年数の6年が「満」であり、成道の35歳が「満」であるとする、必然的に出家年齢の29歳も「満」と考えてよいであろう。

[6] 問題があるのは入滅年齢である。

[6-1] 先に述べたように、入滅年齢を記述するシーンは(1) 舍利弗・目連の入滅に関連する場面など釈尊の沙羅双樹での入滅に先立つ少なくとも1年8ヶ月、あるいは2年8ヶ月ほど前と、(2) 入滅に先立つ8ヶ月ほど前のヴェーサーリの竹林村での場面と、(3) 沙羅双樹の下での入滅当日の場面の三つである。

もし(3)が「満80歳」でしかも後述するように入滅が誕生日(出胎日)当日であったとすると、釈尊は「満80歳」になられたその日に入滅されたことになる。とするならば(2)の時点では、「満79歳」であり、(1)の時点では「満78歳」ないしは「満77歳」ということにならなければならない。

しかるに伝えられる資料はすべて「80歳」である。しかも【4】の [4-2] の『涅槃経』の記述に関する表に明らかなように、白法祖と失釈はともに沙羅双樹下での入滅を記す部分の記述で「79歳」とし、これを遡る8ヶ月ほど前の竹林村での雨安居時には「80歳」とする不思議も存する。

[6-2] まず大部分の伝承がその場面に関係なく「80歳」とするのは、釈尊の入滅年齢

が「80歳」であるという牢固たる伝承があつて、これが固定観念になっていたからであろう。MN.12の‘Mahāsīhānāda-sutta’が舍利弗に対して、「私は年老い、老衰し、高齢で、人生の終わりに達し、齡傾いてすでに80である」という文章は、竹林村での阿難に対する言葉と全く同じであつて、定型化がなされているわけである。したがって入滅に関わる事項はすべて「80歳」ということになってしまったのではなからうか。とするならば釈尊の入滅年齢「80歳」は動かず、もし合理的に竹林村などの記述を理解するならば、それは「概数」を掲げたものということになる。『遊行経』が「吾已老矣年粗八十」とし、『白法祖・涅槃経』が「今仏年已尊且八十」とし、『失訳・涅槃経』が「年且八十」と表現することがそれを表すのかもしれない。「粗」は「あい」「おおまか」「ほぼ」という意であり（諸橋『大漢和辞典』頁9028）、「且」は「おおいさま」を表す場合もあるというから（諸橋『大漢和辞典』頁266）、「80歳にもなってしまった」というようなニュアンスを表すものとも考えられる⁽¹⁾。もし入滅当日に満80歳になられたとすれば、まだこの時点では80歳になっていないわけであるが、80歳に近い老人が「私ももう80歳だから、身体にガタがきて当然だ」などという表現は自然になされるものであろう⁽²⁾。

(1) この部分のパーリ文は‘asitiko me vasso vattati’である。‘asitiko’は‘asiti’に接尾辞の‘-ka’を付したものであるが、これによって「概数」を表すとは必ずしも解釈できない。しかしだからといって、概数でないとも言えないであろう。

(2) 「満」と「数え」の誤差ということも考えられないことはない。後述するように入滅当日＝2月15日に満で80歳になられたとすると、この時点では1月1日で始まる「数え」では81歳であり、その8ヶ月前なら80歳であるからである。しかしこの考え方に従うと、舍利弗などとの関連で説かれる80歳が理解しにくくなる。またその場所場所で年齢の数え方が変わるということも合理的ではなからう。

[6-3] 『白法祖』と『失訳』については意味深長で、竹林村での80歳は「概数」であるかもしれないし、あるいは「数え」であるかもしれない。しかし「79歳」は「概数」とは理解できないし、「数え」で数えて数字が減じるとするのも理解しがたい。とするならば「満年齢」である可能性が高いが、何しろ白法祖と失訳の2本だけの特殊説であり、たといそれが客観的事実であったとしても、本研究がパーリと漢訳に共通する資料を第1次水準とし、もし共通しない場合はパーリを優先するという資料観からすればこれを採用することはできない。

[6-4] よって釈尊の入滅年齢は「80歳」とし、これは年齢の数え方の原則と、苦行年数が満年齢であつて、これに基づいて満年齢として計算すると $29 + 6 + 45$ （成道から入滅までの年数）＝80となり、合理的な数字となるから「80歳」も「満年齢」で表されたものと考えておく。

[7] ただしここでぜひとも紹介しておかなければならない資料がある。それは釈尊の誕生・出家・成道・入滅年齢に関して年代が付された文献である。それらはそれぞれに年代が付されているだけに、どのような基準で年齢が計算されているかが分る。

[7-1] 『ピガンデー氏 緬甸仏伝』⁽¹⁾は釈尊の入胎・出胎・出家・成道・入滅を次のように言う。

入胎＝アニュジャーナ紀元第67年ウッタラサム星宿（ウッタラサム星宿がuttarāsāḍha

をさすとすれば、アーサール八月の満月の日＝4月15日)

出胎＝68年ヴェーシャーカ星宿の下の金曜日(＝2月15日)

出家＝96年月曜日(南方伝承ではアーサール八月の満月の日＝4月15日)

成道＝103年ヴェーシャーカ星宿の水曜日(＝2月15日)

入滅＝148年カチャン月の満月のヴェーシャーカ星宿の火曜日(＝2月15日)

これに基づいて通常のように、「出胎」を誕生日とする「満年齢」を計算してみると、次のようになる。

出家＝満28歳2月

苦行＝満6年10月

成道＝満29歳0月(すなわち誕生日の当日)

入滅＝満80歳0月(すなわち誕生日の当日)

したがって、出家年齢が29歳という伝承に反することになる。

しかしインドには出胎を誕生日とするのではなく、「入胎」を誕生日とするという伝統も存した。これも次号に掲載予定の論文で詳しく述べるが、この伝統が殺人の「人」は入胎以後の胎児も含むことや、三世両重因果が今世を入胎からとすることに現れているのを勘案すれば納得されうるであろう。

そこで「入胎」を誕生日として満年齢を計算してみると次のようになる。

出家＝満29歳0月(すなわち誕生日の当日)

苦行＝満6年10月

成道＝満35歳10月

入滅＝満80歳10月

これに基づくと、出家「満29歳」、苦行「満6年」「足掛け7年」、成道「満35歳」、出家から入滅まで「満50年余」、成道から入滅まで「満45年」、入滅の少なくとも8ヶ月前のヴェーサーリでの雨安居の時点で「満80歳」、沙羅双樹の入滅当日「満80歳」のすべてが合理的に解釈される。

(1) 赤沼智善訳 無我山房刊 大正03年 pp.407～408

[8] ついでに中国における伝承も検討しておこう。

[8-1] 『歴代三宝紀』⁽¹⁾ は年齢の数え方に関係する部分のみを抽出すると次のように言う。

入胎＝莊王九年癸巳四月八日

出胎＝十年(甲午)仲春二月八日夜鬼宿合時

出家＝僖王八年壬子年十九四月八日夜半

成道＝十九年癸亥年三十二月八日明星出時

入滅＝匡王四年壬子二月十五日後夜

これにしたがって「入胎」からの満年齢は次のようになる。

出胎＝満10ヶ月

出家＝満19歳0ヶ月(誕生日当日)

苦行＝10年10ヶ月

成道＝満29歳10ヶ月

入滅＝78歳10月7日

「出胎」からの満年齢は

出家＝満18歳2ヶ月

苦行＝10年10ヶ月

成道＝満29歳0ヶ月

入滅＝満78歳0ヶ月7日

となる。

『歴代三宝紀』は19歳出家、30歳成道、79歳入滅説をとっており、これではいずれも入滅が78歳となって合致しないから、「満年齢」をとっていたのではなかろう。「数え」であるとする、入胎からでは出家が20歳となって合致しないから、これは「出胎」からの「数え年齢」によっていたことがわかる。

ただしこの伝承は前述したように『失訳・般泥洹経』によったものと考えられるが、これでは苦行は足掛け「11年」となって、『失訳・般泥洹経』の「12年」とは合致しない。

(1) 大正49 p.023上。()の中の干支は筆者が補ったもの

[8-2] 『仏祖統紀』⁽¹⁾は次のように言う。

入胎＝(昭王二十五年 癸丑に当たる)以四月八日明星出時降神母胎⁽²⁾

出胎＝昭王二十六年甲寅 夫人懷孕将満十月、……四月八日、日初出時

出家＝五十年戊寅太子年二十五歳二月七日

苦行＝六年

成道＝穆王四年癸未二月八日

入滅＝五十三年壬申二月十五日

これによって「入胎」からの「満年齢」を計算してみると次のようになる。

出胎＝満1歳0ヶ月(ただし母胎にあったのは10ヶ月とする)⁽²⁾

出家＝満24歳10ヶ月

苦行＝満6年0ヶ月

成道＝満29歳10ヶ月

入滅＝満78歳10ヶ月

また「出胎」からの「満年齢」は次のようになる。

出家＝満23歳10ヶ月

苦行＝満6年0ヶ月

成道＝28歳10ヶ月

入滅＝満77歳10ヶ月

『仏祖統紀』は25歳出家、30歳成道、80歳入滅説をとっており、満年齢とすると、入胎からでも、出胎からでもそのすべてに合致しない。したがって「数え年齢」であると考えられるが、その場合は出家・成道は「出胎」を誕生日とするほうに合致するが、それでも入滅は79歳となって合致しない。

(1) 大正49 p.142上

(2) 『仏祖統紀』自身が言うように、これでは12ヶ月間胎内にあったということになって計算

が合わない。両土の暦の違いによるものとしている。

[8-3] 以上のように中国では中国の習慣にしたがって、「出胎」からの「数え年齢」が採用されていたように考えられるが、といてすべてが合理的に解釈できるわけではない。また19歳出家説にしる、30歳成道説にしる、原始聖典には伝わらない特殊説なのであるから、本研究の基準としなければならない必然性はない。

[9] 以上のように南方伝承に従うかぎり、少なくとも釈尊の生涯に関する年齢（年数）表現は「満年齢」であって、その数え方は「入胎」からするのが、もっとも合理的であるが、これには誕生日や成道日・入滅日などの月日が関係するから、ひとまずここで切り上げ、最終的結論はこれらを検討した後を下すこととしたい。

【7】 原始聖典による誕生・出家・成道・入滅の月・日

[1] 前節までの考察の最終的な結論を得るためにも、また正確な「釈尊年表」を月、日単位で作成するためにも、釈尊の誕生（入胎・出胎）・出家・成道・入滅の日付を検討しておかなければならない。

[1-1] まず原始仏教聖典資料を紹介する。次は誕生・出家・成道・入滅のすべてを「2月8日」とする。誕生が入胎であるか出胎であるかの判断はここからはつかない。

①長阿含2 遊行経；八日如来生 八日仏出家 八日成菩提 八日取滅度
二月如来生 二月仏出家 二月成菩提 二月取涅槃。大正01 p.030上

[1-2] 次はすべてを「4月8日」とする。これも誕生が入胎であるか出胎であるかの判断はつかない。

①白法祖訳 仏般泥洹経；経曰仏以四月八日生。八日棄国、八日得道、八日滅度。以沸星時、去家学道、以沸星得道、以沸星時。般泥曰、草木復更華葉、挙国樹木皆更茂盛。仏般泥曰、去三界天中天、光明以滅、一切十方、皆自歸於仏。大正01 p.175下

②失訳 般泥洹経；仏從四月八日生、四月八日捨家出、四月八日得仏道、四月八日般泥洹、皆以仏星出時。大正01 p.188下

[1-3] 釈尊の誕生・出家・成道・入滅の日付について言及する原始聖典は以上のみであって、すべて「涅槃経」関連の文献である。しかしこれらも本文中に述べられたものではなく、経典の最後に付加されているものであって、パーリ本やサンスクリット本には見いだされなから、おそらく原始聖典自身の伝承ではあるまい。事実『白法祖』は「経曰」とか「般泥曰」「仏般泥曰」としているのであって、本来の「涅槃経」の伝承でないことを明言しているわけである。したがって後世の伝承たることは免れず、次節に述べる仏伝経典の伝承と同レベルにあるものと判断せざるを得ない。

[2] 入胎から出胎までの月数をいうものがある。「10月」とする。ただし今までこれも原始聖典の中に加えてきたが、成立の遅いものである。

①根本有部律・雑事；十月満足。大正24 p.298上

[3] そこで以下に仏伝経典やインド成立のその他の文献、あるいは中国撰述の文献の伝えるところを検討する。

【8】入胎の月・日

[1] 入胎月・日についての記事を紹介する。

[1-1] はじめに入胎の月・日を記す仏伝経典資料を紹介する。なお胎内にあった月数を記す部分も紹介するが、すべて「10ヶ月」である。

[1-2] 次は「4月15日」とする。

①Nidānakathā；マハーマーヤー妃はアールハの星祭りの最後の日（【論文1】で考察したように、これは中国暦で4月15日に相当する）に結生された (uttarasālhanakkhat-tena paṭisandhiṃ gaṇhi)。Jātaka vol. I p.050

；彼女（菩薩の母）は菩薩を10ヶ月間その胎内に保護して後、立って出産する (sā pana bodhisattaṃ dasamāse kucchinā pariharitvā ṭhitā va vijāyati)。Jātaka vol. I p.052

‘Nidānakathā’は出胎の月日を明記しないが、10ヶ月胎内に宿るといっているのであるから、生誕はヴェーサーカ月の満月の日、すなわち2月15日としてよいであろう。

[1-3] 次は「4月8日」とする。

①修行本起経 卷上；於是能仁菩薩、化乘白象来就母胎、用四月八日。夫人沐浴……夢見空中有乘白象……、来詣我上忽然不現。大正03 p.463中

；十月已滿、太子身成到四月七日。大正03 p.463下

②過去現在因果経 卷1；爾時菩薩觀降胎時至、即乘六牙白象発兜率宮……、以四月八日明星出時、降神母胎。大正03 p.624上

；菩薩処胎、垂滿十月身諸支節及相好皆悉具足……。大正03 p.624下

入胎が4月8日で10ヶ月胎内にあったといっているのであるから、計算上は出胎は2月8日となるはずであるが、①は出胎も4月7日とする。もっともそれでも「明星出時」とするから夜が明けて4月8日に生まれたといっているのであろう。②は後述するように出胎を4月8日とする版と2月8日とする版があるが、4月8日の入胎であるから、計算上からいえば出胎は2月8日とならなければならないはずである。

[1-4] 次は入胎を「2月」とする。

①方广大莊嚴経 卷2；冬節過已、於春分毘舍佉月（【論文1】で考察したように、ヴァイシャーカ月は中国暦の2月に相当する。また春分とするから、2月15日あるいは2月8日を指すものと考えられる）、叢林花葉鮮沢可愛不寒不熱……、而弗沙星正与月合。菩薩是時從兜率天宮没入於母胎。大正03 p.548下

；乃捨兜率处在人間於母胎中經於十月。大正03 p.549下

[1-5] 具体的な月日を記さないが、気候その他を推測せしめるものがある。

①普曜経 卷2；菩薩過冬盛寒、至始春之初、修合星宿、春末夏初樹木彫落、初始花茂不寒不暑、時三界尊觀察十方、適在宜沸星応下。菩薩便從兜術天上、垂降威靈化作白

象……。大正03 p.491上

；於菩薩在胎十月、開化訓誨三十六載諸天人民、使立声聞及諸大乘。大正03 p.492中

；滿十月已、菩薩臨產之時、先現瑞応三十有二。大正03 p.492下

② 仏本行集經 卷7；爾時護明菩薩、冬分過已至於最勝春初之時、一切樹木諸華開敷、天氣澄清温涼調適、百草新出滑沢和柔滋茂光鮮遍滿於地正取鬼宿星合之時、……正念一心從兜率下。大正03 p.682中

；爾時菩薩聖母摩耶懷孕菩薩將滿十月、垂欲生時……。大正03 p.685中

[2] インド撰述の文献については現在のところ見いだせなかった。

[3] 中国撰述文献を紹介する。

[3-1] 「4月8日」とするもの。

① 歴代三宝紀 卷1；仏以莊王九年癸巳四月八日、現白象形從兜率降中天竺国迦毘羅城淨飯大王第一夫人摩耶右脇。大正49 p.023中

② 釈迦譜 卷1；（普曜經云）以四月八日明星出時降神母胎。大正50 p.015上

③ 釈迦氏譜；以四月八日明星出時降神母胎。大正50 p.089上

④ 仏祖統紀 卷2；（周昭王25年）時菩薩乘六牙白象從兜率宮……放大光明普照十方、以四月八日明星出時降神母胎。大正49 p.141下

[3-2] 「5月15日」あるいは「5月8日」とするもの。

① 大唐西域記 卷6；上座部菩薩以慍咄羅頰沙荼月三十日夜降神母胎、当此五月十五日。諸部則以此月二十三日夜降母胎、当此五月八日。大正51 p.901上

② 釈迦方志 卷上；神降之相彼執不同。上座部云、当唐国五月十五日。諸部又云、当此五月八日。大正51 p.959中

ただし通常‘uttara-āśāḍha’ 30日はāśāḍha月の後半の15日にあたり4月15日、この月の23日は4月8日とされる。これを5月とするのは【論文2】で考察した如く、『大唐西域記』独特の換算である。

[3-3] 「7月15日」とするものもある。

① 唐護法沙門法淋別伝 卷中；准阿含經、推仏是姫周第五主昭王瑕即位二十三年癸丑歲七月十五日、現白象形降神……受胎。大正50 p.207上

【9】 出胎の月・日

[1] はじめに出胎の月日を記す仏伝經典資料を紹介する。

[1-1] 以下は「4月8日」とする。

① 修行本起經 卷上；十月已滿、太子身成到四月七日。夫人出遊過流民樹下、衆花開化明星出時、夫人攀樹枝便從右脇生墮地。大正03 p.463下（「明星出時」とするから、日が変わって4月8日の誕生と解釈した）

- ②異出菩薩本起經；太子以四月八日夜半時生。從母右脇生墮地。大正03 p.618上
- ③太子瑞応本起經 卷上；到四月八日夜明星出時、化從右脇生墮地。大正03 p.473下
- ④仏説十二遊經；仏以四月八日生。大正04 p.146下
- ⑤仏所行讚 卷1；時四月八日 清和氣調適 齋戒修淨徳 菩薩右脇生。大正04 p.001上
- ⑥過去現在因果經 卷1；四月八日（宋・元・明3本にしたがった場合。しかし入胎からすると2月8日がふさわしい）日初出時……、菩薩漸漸從右脇出。大正03 p.625上

[1-2] 以下は「2月8日」とする。

- ①過去現在因果經 卷1；二月八日（高麗版にしたがった場合）日初出時……、菩薩漸漸從右脇出。大正03 p.625上
- ②仏本行集經 卷7；爾時善覺釋種大臣、於彼春初二月八日鬼宿舍時、共女摩耶相隨、向彼嵐毘尼園……。大正03 p.686上

[1-3] 日にちを示さないもの

- ①ブッダチャリタ；プシュヤ星座が吉の相を示したとき、誓願によって心清めた王妃の脇腹より、陣痛も病もなく、世の人々のために男子が生まれた。1-9 p.004
- ②仏本行經 卷1；于時仏星 適与月合 吉瑞応期 從右脇生。大正04 p.058中

[2] その他のインド撰述文献資料を紹介する。ここにはセイロンで著作されたものも含める。

[2-1] 次は「2月15日」とする。

- ①Dīpavaṃsa；正覚者はヴェーサーカ月の満月の日（2月15日）に誕生された（*visā-khamāse punṇamāyaṃ sambuddho upapajjatha*）。p.106

[2-2] 「2月8日」とするもの。

- ①薩婆多毘尼毘婆沙 卷2；二月八日沸星出時生。大正23 p.510中
- ②大般涅槃經（40巻本） 卷30；如來初生出家成道轉妙法輪皆以八日（文脈からして2月である）。大正12 p.545上
- ③大般涅槃經（36巻本） 卷28；如來初生出家成道轉妙法輪皆以八日（文脈からして2月である）。大正12 p.790下

[2-3] 胎内におられた期間。「10月」とする。

- ①鞞婆沙論 卷14；從兜術天終降生母胎、十月已滿住林毘園生、即行七歩、二龍浴身、二十九出家、三十五得道、六年苦行已。大正28 p.523上

[3] 中国撰述文献を紹介する。

[3-1] 「2月8日」とするもの。

- ①歴代三宝紀 卷1；（莊王）十年仲春二月八日夜鬼宿舍時、於嵐毘園波羅樹下右脇而誕。大正49 p.023中
- ②唐護法沙門法琳別伝 卷中；仏莊王十年二月八日生者……。大正50 p.207下
- ②は「長房乃云、仏莊王十年二月八日生者、大為猛浪。若是二月不應論星。長房又云、仏以四月八日下託胎者、託胎既用周月、現生還是周辰、今言二月是亦非也。若周以十一月為正

月、如来不容二月生、凡人正月胎即十月生、四月胎即正月生。仏俯同人世七月胎故乃四月生」という文章の一部である。すなわち周暦では11月が正月であるから、もし10ヶ月胎内にあるとすれば、4月に入胎した場合は2月に出胎することとなるが、11月を正月とすると、正月は2ヶ月早まることとなるから、正月に出胎したこととなるというのであろう。しかし如来は7月に入胎したのであるから4月に出胎したことになるというのであるが、もし胎内期間を10ヶ月として、上記のような計算をするなら、出胎は3月にならなければならない。上記の計算もよくわからないが、この4月も理解しがたい。

[3-2] 「3月8日」あるいは「3月15日」とするもの。

①大唐西域記 卷6；菩薩以吠舍佉月後半八日、当此三月八日。上座部則曰、以吠舍佉月後半十五日、当此三月十五日。大正51 p.902上

②釈迦方志 卷上；当此三月八日者。上座部云、当此三月十五日者。大正51 p.959下
しかしこれは通常は2月に相当することは前述の通りである。

[3-3] 「4月8日」とするもの。

①釈迦譜 卷1；菩薩四月八日夜半明星出時生。身長丈六出十二遊經。大正50 p.010上
；（大華嚴經云）十月満足於四月八日日初出時、夫人見彼園中有一大樹、名曰無憂…
…即举右手欲牽摘之、菩薩漸漸從右脇出。大正50 p.016上

②唐護法沙門法琳別伝 卷中；准阿含經、……昭王二十四年甲寅之歲四月八日、於嵐毘園內波羅樹下、右脇而誕生。大正50 p.207上

③釈迦氏譜；十月満足、於四月八日日初出時於無憂樹下花葉茂盛、便举右手欲牽摘之、菩薩漸漸從右脇出。大正50 p.089中

④仏祖統紀 卷2；（周昭王）二十六年甲寅夫人懷孕將滿十月……、往藍毘尼園中、十月満足、四月八日、日初出時……菩薩漸漸從右脇出。大正49 p.142上（注で在胎を十月としながら入胎も四月八日とするので、これでは十二月になる矛盾を注意している）

【10】出家の月・日

[1] はじめに仏伝經典資料を紹介する。

[1-1] 「4月15日」とする。

①Nidānakathā；菩薩は手中にある転輪王の位を棄てて（cakkavattirajjam chaddetvā）、
アーサール八月の満月のアーサールハの星祭りの最後の夜（āsālhipunṇmāya uttarā-
sālhanakkhatte 4月15日）に出家された（nikkhamitvā）。Jātaka vol. I p.063

[1-2] 「4月8日」とする。

①太子瑞応本起經 卷上；至年十九、四月八日夜、……踰出宮城。大正03 p.475中

②修行本起經 卷下；至年十九、四月七日、誓欲出家、至夜半後、明星出時、……於是城門自然便開、出門飛去。大正03 p.467下（「明星出時」とするので、4月8日になつてからと解釈した）

[1-3] 「2月8日」とする。

①過去現在因果經 卷2；爾時太子心自念言、我年已至一十有九、今是二月、復是七日、

宜応方便思求出家。大正03 p.632中

[2] その他のインド撰述資料を紹介する。「2月8日」とする。

①大般涅槃經（40巻本） 巻30；如來初生出家成道轉妙法輪皆以（2月）八日。大正12 p.545上

②大般涅槃經（36巻本） 巻28；如來初生出家成道轉妙法輪皆以（2月）八日。大正12 p.790下

[3] 中国撰述文献を紹介する。

[3-1] 「2月8日」とするもの。

①釈迦譜；年至十九……年已至十九……二月七日。大正50 p.023下、024上

②釈迦氏譜；因果云、我年十九今二月七日出家時至。……見明相出光照十方、太子即師子吼言、過去諸仏出家亦然。大正50 p.091上

③仏祖統紀 巻2；五十年戊寅太子年二十五歳……二月七日。大正49 p.144上

[3-2] 「3月8日」あるいは「3月15日」とするもの。

①大唐西域記 巻6；踰城出家時亦不定、或云菩薩年十九、或曰二十九。以吠舍佉月後半八日踰城出家。当此三月八日。或云以吠舍佉月後半十五日、当此三月十五日。大正51 p.903上

ただしこれは通常は2月に相当する。

[3-3] 「4月8日」とするもの。

①歴代三宝紀 巻1；（僖王）八年壬子年十九四月八日夜半踰城出家。大正49 p.023中

②唐護法沙門法琳別伝 巻中；昭王四十二年壬申之歳四月八日夜半踰城出家、故瑞応経云、太子十九四月八日夜半……。大正50 p.207中

【11】成道の月・日

[1] はじめに仏伝経典資料を紹介する。

[1-1] 「4月8日」とするもの。

①十二遊経；以三十五得道、從四月八日至七月十五日、坐樹下為一年。大正04 p.147上

[1-2] 「2月15日」とするもの。

①Nidānakathā；彼女（Sujātā）は大士が苦行をして第6年を満じられたとき、ヴェーサーカ月の満月の日に……（sā mahāsattassa dukkarakārikam karontassa chaṭṭhe vasse paripuṇṇe visākhapuṇṇamāya）。vol. I p.068

[1-3] 「2月23日」とするものもある。

①仏本行集経 巻25～30；爾時菩薩六年既満、至春二月十六日時、内心自作如是思惟、我今不応將如是食、食已而証阿耨多羅三藐三菩提……至於二月二十三日、於晨朝

時、齊整著衣欲向優婁頻螺聚落而行乞食……。第四於夜後分明星將欲初出現時、夜尚寂靜一切衆生行与不行皆未覺寤、是時婆伽婆即生智見、成阿耨多羅三藐三菩提。大正03 pp.771中～795下

[1-4] 次は「2月8日」とする。

- ①過去現在因果經 卷3；爾時菩薩以慈悲力、於二月七日夜、降伏魔已、放大光明即便入定思惟真諦於諸法中……。第三夜分破於無明、明相出時得智慧光、斷於習障成一切種智。（明相が出てからであるから、成道は2月8日を示すと考えられる）大正03 p.641中～642中

[2] その他のインド撰述文献を紹介する。

[2-1] 「2月15日」とするもの。

- ①Mahāvamsa；マガダのウルヴェーラーの菩提樹のもとで大聖者はヴェーサーカ月の満月の日に（*vesākhapunnāmāyam*）無上菩提に到達された（*patto sambodhim uttamam*）。I-12 p.004

[2-2] 「2月8日」とするもの。

- ①大般涅槃經（40巻本） 卷30；如來初生出家成道轉妙法輪皆以（2月）八日。大正12 p.545上
②大般涅槃經（36巻本） 卷28；如來初生出家成道轉妙法輪皆以（2月）八日。大正12 p.790下
③薩婆多毘尼毘婆沙 卷2；二月八日沸星現時初成等生覺。大正23 p.510中

[3] 中国撰述文献を紹介する。

[3-1] 「2月8日」とするもの。

- ①釈迦譜 卷1；（出因果經）於二月七日夜降伏魔已放大光明……。大正50 p.034下
②歷代三寶紀 卷1；（僖王）十九年癸亥年三二月八日明星出時、朗然覺悟成無上道。大正49 p.023中
③唐護法沙門法琳別傳 卷中；周第六主穆王諱滿二年癸未二月八日、仏年三十成道、故普曜經云、菩薩明星出時豁然大悟。即此年也。大正50 p.207中
；仏以周惠王十九年癸亥二月明星出時成道者、亦有大過……。大正50 p.207下
④釈迦氏譜；二月七日夜、降魔……明星出時、霍然大悟得成正覺。大正50 p.092上
⑤仏祖統紀 卷2；二月七日惡魔退散……明星出時霍然大悟即八日曉天也得無上道為最正覺。大正49 p.146上

[3-2] 「4月8日」とするもの。

- ①歷代三寶紀 卷1；十二遊經云、仏從四月八日至七月十五日坐樹下以為一年。大正49 p.024

[3-3] 「3月8日」あるいは「3月15日」とするもの。

- ②大唐西域記 卷8；如來以印度吠舍佉月後半八日成等正覺、當此三月八日也。上座部則吠舍佉月後半十五日成等正覺、當此三月十五日也。是時如來年三十矣。或曰年三十五矣。大正51 p.916中

②釈迦方志 卷下；仏以唐国三月八日成道、上座部云、当此三月十五日成道。大正51 p.962下
ただし普通これは2月8日あるいは2月15日に相当することはすでに述べた通りである。

【12】入滅の月・日

[1] 仏伝經典には入滅の月日を記す資料はない。

[2] その他のインド撰述文献資料を紹介する。すべて「2月15日」である。

①Mahāvamsa；クシナーラーの沙羅双樹の間のよい場所で、ヴェーサーカ月の満月の日に (vesākhapunnāmāyam) 世間の灯は般涅槃された。III-2 p.016

②Samantapāsādikā；ヴェーサーカ月の満月の日の早朝に無余涅槃界に般涅槃したとき…… (vesākhapunnamadivase paccūsamaye anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbute)。vol. I p.004

③大般涅槃經 (40卷本) 卷1；二月十五日臨涅槃時、以仏神力出大音声……。大正12 p.365下

④大般涅槃經 (40卷本) 卷30；如来何故二月涅槃。二月名春、春陽之月万物生長……。大正12 p.545上
；如来初生出家成道轉妙法輪皆以八日、何故涅槃独十五日……。大正12 p.545上

⑤大般涅槃經 (36卷本) 卷1；二月十五日臨涅槃時、以仏神力出大音声……。大正12 p.605上

⑥大般涅槃經 (36卷本) 卷28；如来何故二月涅槃。善男子、二月名春。春陽之月万物生長……。大正12 p.790中
；如来初生出家成道轉妙法輪皆以八日、何故涅槃独十五日……。大正12 p.790下

⑦善見律毘婆沙 卷1；於俱尸那末羅王林娑羅双樹間、二月十五日平旦時、入無余涅槃。大正24 p.673中

⑧大般泥洹經 卷1；一時仏在拘夷城力士生地、熙連河堅固林双樹間、与八百億比丘前後困遶、二月十五日臨般泥洹。大正12 p.853上

なお、“Dīpavamsa”は、般涅槃後4ヶ月にして第1結集が行われたとする (parinibbute catumāse hessati paṭhamasaṃgaho) (1)。これは雨安居中に行われたのであるから、2月15日に入滅されたという伝承を下敷きにしているのであろう。

(1) p.015

[3] 中国撰述文献資料を紹介する。

[3-1] 「2月15日」とするもの。

①歴代三宝紀 卷1；二月十五日後夜於中天竺拘尸那城入般涅槃。大正49 p.023中

②唐護法沙門法琳別伝 卷中；周穆王五十二年壬申之歲二月十五日、仏年七十九方始滅度、故涅槃經云、二月十五日臨涅槃時、出種種光、大地六種震動……。大正50 p.20

7中

③大慈恩寺三蔵法師伝 卷3；仏処世八十年、以吠舍佉月後半十五日入涅槃。当此二月十五日。説一切有部復云、仏以迦刺底迦月後半入涅槃、当此九月八日。大正50 p.235中

④釈迦氏譜；涅槃云、二月十五日晨朝放光照大千界……。大正50 p.093下

⑤仏祖統紀 卷4；(述曰)則知此年(53年)二月十四日下閻浮提、十五日入涅槃。大正49 p.165上

；二月十五日、仏在拘尸那城此云三角力士生地娑羅双樹間、臨涅槃時……。大正49 p.165中

[3-2] 「2月8日」とするもの。

①釈迦譜 卷4；菩薩処胎経云、仏在双樹、欲捨身寿入涅槃、二月八日夜半。大正50 p.073中

[3-3] 「3月15日」とするもの。

①大唐西域記 卷6；仏以生年八十、吠舍佉月後半十五日入般涅槃、当此三月十五日也。説一切有部則仏以迦刺底迦月後半八日入般涅槃、此当九月八日也。大正51 p.903中

②釈迦方志 卷上；拘尸那揭羅国中印度……有云、當此土三月十五日者、説有部云、当此九月八日。諸部異議云、至今貞觀二十年、則經一千二百一十二年矣。此依菩提寺石柱記也。或云、千三百年。或千五百余年。或云、始過九百未千年者。大正51 p.960上
ただし通常は2月15日となる。

[3-4] 「9月8日」とするものもある。

①大唐西域記 卷6；仏以生年八十、吠舍佉月後半十五日入般涅槃、当此三月十五日也。説一切有部則仏以迦刺底迦月後半八日入般涅槃、此当九月八日也。大正51 p.903中

②大慈恩寺三蔵法師伝 卷3；仏処世八十年、以吠舍佉月後半十五日入涅槃。当此二月十五日。説一切有部復云、仏以迦刺底迦月後半入涅槃、当此九月八日。大正50 p.235中

③釈迦方志 卷上；拘尸那揭羅国中印度……有云、当此土三月十五日者、説有部云、当此九月八日。諸部異議云、至今貞觀二十年、則經一千二百一十二年矣。此依菩提寺石柱記也。或云、千三百年。或千五百余年。或云、始過九百未千年者。大正51 p.960上
ただし迦刺底迦月は通常は8月に相当する。後半8日は8月8日となる。

【13】その他の文献が伝える誕生・出家・成道・入滅年齢とその月・日

[1] 以上原始聖典、仏伝經典、その他のインド撰述文献、中国撰述文献の入胎・出胎・出家・成道・入滅に関する日付についての伝承を紹介してきた。以下にはより新しい、しかし現代の研究成果ではない、むしろ古伝承と呼ぶべきいくつかの歴史文献の伝える伝承を紹介する。

[1-1] “Sāsanavaṃsa” は次のように言う (1)。

入胎=アーサール八月の満月の木曜日 (4月15日)

出胎＝入胎から10ヶ月を経てヴェーサーカ月の満月の金曜日（2月15日）

出家＝29歳

成道＝ヴェーサーカ月の満月の明け方（2月15日）

入滅＝45年間説法して80歳

- (1) “Sāsanavaṃsa” pp.002～003、生野善応『ビルマ上座部仏教史』（山喜房仏書林 1980.5）
pp.004～005 ちなみに結婚は16歳。

[1-2] “Jinakālamāli” は次のように言う。

入胎＝アーサール八月の満月のウッタラーサール八星座の日（āsāḷhapuṇṇamāyaṃ
uttarāsāḷhanakkhattena paṭisandhiṃ …… gaṇhi）（4月15日）⁽¹⁾

出胎＝10ヶ月の間胎内で保護してヴィサーカ月の満月のヴィサーカ星座の日（da-
samāse kucchinā pariharitvā visākhapuṇṇamāyaṃ visākhanakkhattena vijāyi）（2
月15日）⁽²⁾

出家＝ラーフラの生まれた29歳のアーサール八月の満月の日（ekūnatimṣatime
vasse āsāḷhapuṇṇamāyaṃ）（4月15日）⁽³⁾

成道＝ヴィサーカ月の満月の日（visākhapuṇṇamāyaṃ）（2月15日）⁽⁴⁾

- (1) p.025
(2) p.026 ちなみに結婚は16歳。
(3) p.027
(4) p.032 ちなみに苦行は6年、成道は35歳。

[1-3] 『ピガンデー氏 緬甸伝』にも記述があるが、これはすでに【6】の[7-1]で紹介したから省略する。

【14】入胎・出胎・出家・成道・入滅の月・日に関する伝承系統

[1] 以上紹介してきた入胎・出胎・出家・成道・入滅の月日について文献ごとに整理し、表にしておく。月はともかく日は8日か15日が多いので、8日系と15日系に分けておいた。

[1-1] 原始聖典

文献	入胎		期間	出胎		出家		成道		入滅	
	8日	15日		8日	15日	8日	15日	8日	15日	8日	15日
遊行経				2月		2月		2月		2月	
白法祖・泥洹				4月		4月		4月		4月	
失訳・泥洹				4月		4月		4月		4月	
根本有部・雑事			10月								

[1-2] 仏伝經典

文献	入胎		期間	出胎		出家		成道		入滅	
	8日	15日		8日	15日	8日	15日	8日	15日	8日	15日
Nidānakathā		4月	10月		2月		4月		2月		
修行本起經	4月		10月	4月		4月					
太子瑞応本起經				4月		4月					
普曜經			10月								
異出菩薩本起經				4月							
仏本行集經			10月	2月				*1			
十二遊經				4月				4月			
仏所行讚				4月							
過去現在因果經	4月		10月	4月	2月	2月		2月			
方广大莊嚴經	*2		10月								

* 1 = 2月23日 * 2 = 2月

[1-3] インド撰述文献

文献	入胎		期間	出胎		出家		成道		入滅	
	8日	15日		8日	15日	8日	15日	8日	15日	8日	15日
Dīpaṃsa					2月						2月
Mahāvamsa									2月		2月
Samantapāsādikā											2月
善見律毘婆沙											2月
薩婆多毘尼毘婆沙				2月				2月			
鞞婆沙論			10月								
般泥洹經											2月
涅槃經 (40 卷本)				2月		2月		2月			2月
涅槃經 (36 卷本)				2月		2月		2月			2月

[1-4] 中国撰述文献

文献	入胎		期間	出胎		出家		成道		入滅	
	8日	15日		8日	15日	8日	15日	8日	15日	8日	15日
釈迦譜	4月		10月	4月		2月		2月		2月	
歴代三宝紀	4月			2月		4月		2月			2月

法琳別伝		7月		2月 4月		4月					2月
大唐西域記	5月	5月		3月	3月	3月	3月	3月	3月	9月	3月
慈恩三蔵法師伝										9月	2月
釈迦氏譜	4月			4月		2月		2月			2月
釈迦方志	5月	5月		3月	3月			3月	3月	9月	3月
仏祖統紀	4月		10月	4月		2月		2月			2月

[1-5] その他文献

文献	入胎		期間	出胎		出家		成道		入滅	
	8日	15日		8日	15日	8日	15日	8日	15日	8日	15日
ビルマ伝					2月				2月		2月
Sāsanavaṃsa		4月	10月		2月				2月		
Jinakālamāli		4月	10月		2月		4月		2月		

[2] 以上の表によって、入胎・出胎・出家・成道・入滅の日付についていくつかの系統があることがわかる。

[2-1] まず月はともかくとして、日にちの方では8日とする伝承と、15日とする伝承の2つに分れる。15日とするものは『善見律毘婆沙』を含む南方伝承であり、8日とするのは北伝系の伝承であるとしてすることができる。

[2-2] しかしながら『大般涅槃経（40巻本）』『大般涅槃経（36巻本）』『般泥洹経』は他の出胎・出家・成道を2月8日とするにかかわらず、入滅のみを2月15日とする⁽¹⁾。これらは特異な伝承というべきであるが、中国撰述文献では『歴代三宝紀』『法琳別伝』『釈迦氏譜』『仏祖統紀』があり、これらは上記の『大般涅槃経（40巻本）』などの影響を受けたものと考えられる。

(1) 『涅槃経』自身は「如十五日月無虧盈、諸仏如来亦復如是、入大涅槃無虧盈、以是義故、於十五日入般涅槃」という。大正12 p.545上（40巻本）、p.790下（36巻本）

[2-3] また系統として入胎はおくとして、出胎・出家・成道・入滅を同じ月とする系統と、異なるとする系統に分れる。異なるとする系統は南方伝承であって、同じとする系統は北方伝承とすることができる。

すなわち南方伝承は入胎と出家を4月15日とし、出胎と成道と入滅を2月15日とする。

これに対して北方伝承は出胎も出家も成道も入滅も2月、あるいは4月、あるいは3月とするのであって、原始聖典としての『遊行経』『白法祖訳・泥洹経』『失訳・泥洹経』などや、インド撰述の『大般涅槃経（40巻本）』『大般涅槃経（36巻本）』、あるいは多くの北伝系仏伝経典は入滅の月日を記さないが、これに属する。

中国撰述文献は2通りに分け、『大唐西域記』や『釈迦方志』は北伝系に属する。しかし

『歴代三宝紀』は南伝系に属し、『法琳別伝』もこれに含めてよいかもしれない。

しかし『釈迦譜』『釈迦氏譜』『仏祖統紀』は入胎・出胎を同じ月とし、出家・成道・入滅を異なる月とする特殊例である。

[2-4] しかし入胎から出胎までの胎内にあった期間はすべて「10ヶ月」とするのであるから、そもそも入胎の月と出胎の月が同じというのはおかしい。これでは12ヶ月になってしまうからである⁽¹⁾。そこで『釈迦譜』『釈迦氏譜』『仏祖統紀』などの入胎月をそのまま尊重するとすれば、出胎月は2ヶ月早まることとなり、そうすれば北伝系の伝承と同じとなる。おそらくこれらは入胎と出胎が混同したのであろう。

- (1) 『仏祖統紀』は次のように言う。「前言四月八日降胎、今言四月八日出胎。並出因果經。南山云、降胎出胎、皆言四月八日。則是十二月在胎文。今此文言十月滿足者、且約人間十月懷妊為言、若仏所行讚經、則云三月八日生、此皆誤人用歷。兩土不同、然内外典籍、多言四月八日」と。しかしいかにも苦しい解釈であるといわなければならない。おそらくここにいわれるように、『過去現在因果經』や『修行本起經』からボタンの掛け違いが始まったのであろう。大正49 p.142上

[2-5] 以上のように考えると、北伝系の伝承では、出胎も出家も成道も入滅も同じ月ということになるが、これに「2月」説、「4月」説、「3月」説が混在していることとなる。

まず「3月説」は『大唐西域記』に源泉があると思われるが、これは【論文2】で考察したように、ヴァイシャーカ月の白分の中国暦への換算がずれた故であって、通常の換算では「2月」となる。

おそらく「4月」も同じくヴァイシャーカ月の白分を指すのであって、インド暦から中国暦への換算の際に生じた誤差であって、上述したように2月とすべき月である。実は南方伝承で2月15日としたのは、この月の白分の15日であって、したがってすべては同じ「2月」を指し示しているとしてよい。

[2-6] したがって伝承系統を大きく分けると

- (1) 入胎と出家を4月15日（アースール八月の白分第15日）、出胎・成道・入滅を2月15日（ヴァイシャーカ月の白分第15日）とする南方伝承
- (2) 出胎・出家・成道・入滅のすべてを2月8日（ヴァイシャーカ月の白分第8日）とする北方伝承

の2つとなる。

他に『大乘涅槃經』の系統に属するものや、成道を2月23日とするなど、他の特異な伝承があるが、これはとりあえず無視してよいであろう。

[3] さて本総合研究としてどちらの系統を尊重すべきであろうか。いずれにしてもこれら日付に関しては原始聖典に典拠を見いだすことは難しく決め手に欠く。しかし本研究は漢巴共通の伝承がない場合はパーリの伝承を優先させるという姿勢に立つのであるから、ここでも南方伝承を尊重しなければならない。以上の資料は原始聖典資料ではないとはいえ、南伝の原始聖典資料を基礎として形成された伝承であろうからである。

しかもその方が合理的であるというはっきりした証拠も存する。パーリ聖典には出家後の苦行を「7年」とするものがあり、それは「足掛け7年」であることは【3】の[2-2]で

述べた通りである。しかし北方伝承のように、出家月日と成道月日が同じであるとする、ちょうど「満6年」となり「足掛け7年」にはならない。したがってパーリ聖典の云う「足掛け7年」を合理的に解釈するためには、出家と成道の日時が異なる南方伝承によらなければならないこととなる。

以上のような理由で、必ずしもそれが歴史的事実であったとはいえないが、本研究では釈尊の入胎と出家は4月15日（アーサール八月の白分第15日）、出胎・成道・入滅は2月15日（ヴァイシャーカ月の白分第15日）という南方伝承にのっとることとする。

【15】 結 語

[1] 以上釈尊の出家・成道・入滅年齢と生誕（入胎・出胎）・出家・成道・入滅の日付について調査してきた。一応の結論は次のようになる。

[1-1] まず出家・成道・入滅年齢については、原始仏教聖典の指し示す結論は次のようになる。

出家＝満29歳

苦行＝満6年、足掛け7年

成道＝満35歳

入滅＝満80歳

[1-2] 入胎・出胎・出家・成道・入滅の日付は大きく分けると南方伝承と北方伝承の二つとなるが、南方伝承の方が合理的であって、本研究の基本的姿勢とも合致するからこれに従うと次のようになる。

入胎 出胎前年のアーサール八月の満月の日、すなわち4月15日

出胎 ヴェーサーカ月の満月の日、すなわち2月15日

出家 満29歳のアーサール八月の満月の日、すなわち4月15日

成道 満35歳のヴェーサーカ月の満月の日、すなわち2月15日

入滅 満80歳のヴェーサーカ月の満月の日、すなわち2月15日

[2] 以上の年齢計算について誕生を「入胎」からとするか、「出胎」からとするかという問題を保留してきた。

[2-1] すでに【6】の[7-1]で、『ピガンデー氏 緬甸仏伝』の云うところを検討した際に、もし入胎日や出家日が『ピガンデー氏 緬甸仏伝』のいうとおりであるとすれば、これがもっとも合理的に原始聖典資料を解釈できると述べた。そしてその結果やはりその月日に従うべきであるという結論に達したのであるから、「入胎」からする「満年齢」の数え方を採用すべきことはいうまでもないが、なお念のために若干の検証を施しておく。

試みに入胎からと出胎からの満年齢の月単位でこの対照表を作ってみると次のようになる（年は『ピガンデー氏 緬甸仏伝』によった）。

	入胎から起算	出胎から起算
入胎	67.4.15	
出胎	68.2.15	10月
出家	96.4.15	29歳0月
		28歳2月
	* 苦行の年数は共に6年10月	
成道	103.2.15	35歳10月
		35歳0月
入滅	148.2.15	80歳10月
		80歳0月

[2-2] この表から知られる通り、年単位では成道年齢も入滅年齢も、入胎から起算しても出胎から起算しても影響はない。ともに満年齢では35歳と80歳になるからである⁽¹⁾。

しかし問題は出家年齢である。もし出胎を採用するとすると、満28歳2月となってしまう。したがって入胎からの満年齢でなければならない。

[2-3] またここで思い出されるのが“Mahāparinibbāna-s.”などに記される釈尊の最晩年の年齢に関する記事である。もし出胎から年齢を数えると、すべての傳承は出胎日と入滅日を同じ日とするのであるから、ちょうど80歳の誕生日に入滅されたことになる。したがって厳密に言えば、その3ヶ月前の入涅槃の宣言の時点や、さらにその前の雨安居に入られたときは当然ながらまだ満79歳であったということになる。そこでこれまではそれは「概数」を表したものと解釈してきだが、しかし入胎から数える年齢法に基づけば、雨安居に入るのは入胎日であるアサール八月の満月の日（4月15日）の翌日（4月16日）であるから、まさにちょうど満80歳になられたことになる。とするならば、雨安居に入られたときに「80歳となった」というのはまさにぴったりと符合することになる。

[2-4] しかも仏教では人間の一生は「出胎」から始まるのではなく、「入胎」から始まると考えていた。「比丘らよ、母の胎内で (mātu kucchismiṃ) 第一の心が生じ (paṭhamam cittam uppannam)、第一の識が現れた (paṭhamam viññāṇam pātubhūtam)、これによって誕生とする (tadupādāya sā v'assa jāti)、(したがって) 比丘らよ、入胎から20を (gabbhaviṣam) 具足戒とすることを認める」⁽¹⁾と定められたのであり、また「殺人罪」の「人」を「人身 (manussaviggaho) とは、母の胎内で (mātu kucchismiṃ) 第一の心が生じ (paṭhamam cittam uppannam)、第一の識が現れて (paṭhamam viññāṇam pātubhūtam) 死に至るまで (yāva maraṇakālā)、この間を人身という (etthantare eso manussaviggaho nāma)」⁽²⁾と定義するから、墮胎は明確に「殺人罪」とされるのである。また説一切有部が十二縁起を三世兩重因果として解釈する際、「入胎」を今世の始まりとするのもこれによる。

(1) Vinaya vol. I p.093、『四分律』卷17 大正22 p.680下、卷34 p.811上、『五分律』卷8 大正22 p.061中、『根本説一切有部毘奈耶』卷41 大正23 p.853下

(2) Vinaya vol. III p.073、『四分律』卷2 大正22 p.576下、『五分律』卷2 大正22 p.008中、『十誦律』卷2 大正23 p.008下、『根本説一切有部毘奈耶』卷7 大正23 p.660中

[2-5] ただしビルマではビルマ暦（太陰暦）のカソー月（Kahson）の満月に仏の誕生・成道・初転法輪・入滅を記念するウェーサカ祭が行われる⁽¹⁾。これはヴェーサーカ月の満月の日に相当し、タイでもスリランカでも同じ日に同じ祭りを行う⁽²⁾。すなわち2月

15日に釈尊の誕生日を祝うわけであるから、誕生日を「出胎」で考えているわけである。となると上記の「誕生日」を入胎とする伝統と齟齬を来すことになるが、人間の一生の始まりを仏教教理の上から「入胎」としようが、一般的な感覚では「出胎」が自然であって、しかも普通は「入胎日」は正確には知りえないのであるから、この場合は「出胎」の祝いと考えておけばよいであろう。

しかもウェーサーカ祭の眼目は「入滅」の記念日が主な趣旨であって、成道も、初転法輪も、そして「出胎」も同じ日であるから、合わせて一緒にお祭りすると考えてもよいのではなかろうか。

- (1) 生野善応『ビルマ仏教—その実態と修行』（昭和50年3月 大蔵出版社）p.266
- (2) Kenneth E. Wills “Thai Buddhism—Its Rites and Activities” (Bangkok, 1975) p.072、
中村元『ゴータマ・ブッダⅡ』（中村元選集 [決定版] 第12巻 1992年5月 春秋社）p.35

5

[3] いずれにしても歴史的事実がどうであったのかはわからない。しかし本研究はパ漢共通資料を第1次水準とし、もしパ漢において相違がある場合にはパーリ資料を尊重するというのが基本的姿勢である。誕生や出家・成道・入滅などの月日に関する原始仏教聖典資料が存在しないから、資料価値としてはかなり低下すると云わなければならないが、それでも同じ水準の資料価値である「仏伝経典」のうちの漢・パどちらを尊重するかとなれば、南方伝承を尊重せざるを得ないであろう。それがパーリ聖典の編集者たちの釈尊イメージをより多く伝えているであろうからである。しかもそれで原始仏教聖典資料と齟齬を来さず、むしろ苦行年数や雨安居時点での年齢が合理的に理解できるのであるからなおさらである。

そこで本研究の立場としては、次を結論とする。

- (1) 年齢は入胎＝アーサール八月の満月の日（4月15日）から起算する満年齢とする。
したがって誕生日は4月15日。
- (2) 出胎は年齢10ヶ月のヴェーサーカ月の満月の日（2月15日）。
- (3) 出家は満29歳のアーサール八月の満月の日（4月15日）、すなわち29回目の誕生日当日。
- (4) 成道は満35歳10ヶ月のヴェーサーカ月の満月の日（2月15日）。
- (5) 入滅は満80歳10ヶ月のヴェーサーカ月の満月の日（2月15日）。